

# 華岡青洲の「青洲医談」に関する研究

## ——諸写本の書誌, 成立, 内容, 異名同書についての考察——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付: 平成30年2月12日/受理: 平成30年6月27日

**要旨:** 華岡青洲の研究は100年も続けられてきたにも拘わらず、彼の著述は適切に解明されていない。彼自身の手によって編集された写本がなく、出版された著書もないからである。加えて、同名異書、異名同書が存在して混乱している。著者は「青洲医談」の写本51本を調査し、本間玄調が編集した4巻本を最も信頼すべきとした。その原初の巻は1816年までに稲川惟家が青洲の口述を記録して出来上がったと考えられ、その後、巻数が増えて4巻になった。後に第2巻と3巻は「灯下医談」とも称された。一卷本の「青洲医談」は4巻本のいずれかの写本か、複数の巻からの抄本である。本写本は青洲の医学、医哲学に関する条文を含んでおり青洲研究には重要である。

**キーワード:** 華岡青洲, 青洲医談, 4巻本, 本間玄調, 灯下医談

### はじめに

華岡青洲(1760-1835, 以下「青洲」と略)は、経口全身麻酔薬「麻沸散」を開発して各種の選択的外科手術を行うことを可能にして、江戸時代後期のおが国の外科学に画期的な進歩をもたらした。彼の医学・医術、そして医哲学は、数十冊に及ぶ著述によってその概要が知られる<sup>1)</sup>。しかしながら、これらの著述は、以下に述べる3つの理由によって、写本間にいわゆる「同名異書」、「異名同書」という混乱状態が出現した。第一の理由は、青洲の口述を門人が筆録したものの、青洲自身が書写した著述ではなかったこと、第二の理由は青洲自らの手によって整理、編集されたものではなかったこと、第三の理由は門人、さらに他門の人によっても書写が繰り返されたために、書名とその内容に大きな変化を生ずることになったことである。1835年の青洲の死去によって、このような錯綜の傾向に一層拍車がかかり、華岡流医術を学ばんとする医師は勉学上の困難さを覚えるようになった。

このような事態を些かでも改善しようと努力したのが、越後出身の春林軒門人佐藤持敬(敬齋)で、彼は1861年に「華岡氏遺書目録」を編集した<sup>2)</sup>。現代風に表現すれば、一種のガイドライン(指針)を作成したのである。「同名異書」、「異名同書」の解消を目的に、当時、春林軒に所蔵されていた青洲の著述を収載した目録であった。しかし、残念なことに、この目録は著述を利用頻度順に収載した形跡が認められるものの、何ら系統的に分類された目録でなかったため、折角編まれたのであったが、どれ位門人たちによって有効に活用されたかは判然としない。というのは、少なくとも著者が知る限り、札幌の華岡家(直系)に所蔵されている一本以外に、この目録の写本の所在が知られていないからである。もっとも、このことは青洲の著述目録の写本を作るほど学習熱心な春林軒の門人が、最幕末期には最早いかなかったことを示唆するのかも知れない。呉がこの目録に欠落していた著述13種を補った書目録が、現今我々が見る「華岡氏遺書目録」<sup>2)</sup>である。

佐藤持敬は、彼よりも10数年前に、水戸出身

で同じく春林軒の門人である本間玄調（以下「玄調」と略）が青洲の著述を整理編集したことを知らなかった。玄調は、青洲の著述が書写の繰り返しによって書名、内容が乱雑になっていることを嘆いて、数年をかけて写本を収集し、後世に遺すべき書目を選定した。そして、1850年に編集作業を終えたのが「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」である。初集は「瘍科神書」、二集は「瘍科鎖言」、三集は「險症百問答」、「乳岳辨」、「乳岩準附録」、「天刑秘録」、「疔瘡辨名」、四集は「産科鎖言」、「痢疾鎖言」、五・六集が「青洲医談」、七集が「撮要方」、「瘍科方筈」、八集が「膏藥便覧」、「膏藥附録」、「春林軒丸散方」、「丸散方考」、九集が「青囊秘録」、「脚氣翼方」、十・十一集が「禁方録」、十二・十三集が「統禁方録」、十四・十五集が「奇患録」となっている<sup>3)</sup>。これらの中で、処方集、図譜類を除いて、外科に直接関連する著述として、初集の「瘍科神書」、二集の「瘍科鎖言」と共に「青洲医談」が五、六集に納められていることは、玄調がこの「青洲医談」を甚だ重要と評価していたことを示している。なお、「青洲医談」は別に「青洲先生医談」、「青洲先生医話」、「青洲花岡先生医談」などとも称されるが、本稿では一般的呼称として「青洲医談」に統一して記述する。個別の写本ではこの限りではない。

今回、著者は「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」の五・六集の「青洲医談」（以下「青洲医談（二十一種本）」と略<sup>4)</sup>）を含む「青洲医談」や「異名同書」の写本51本を精査して、これまで全く解明されていなかった「青洲医談」の書誌や成立年代、書写本の系統を明らかにして、青洲研究を一步進めることが出来たと考えられるので報告する。

## 1. 「青洲医談」に関する先行研究

上述したように「青洲医談」が「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」に納められて、重要であるとされた著述であるにも拘わらず、その書誌、成立年代や華岡流医学における意義に関しては、これまで本格的な研究が殆ど行われてこなかった。1904年の富士川 游の「日本医学史」<sup>5)</sup>では

数頁を費やして青洲の事績が述べられているが、「青洲医談」についての言及は全く見られない。次いで、呉 秀三は1923年に出版した「華岡青洲先生及其外科」の「第三巻 青洲先生ノ著述」において、佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」を収載した。その中にこの「青洲医談 三巻」の名が披見されるが、これに注して「淡海稻惟家筆記。下巻或名『灯下医談後篇』。疑誤。」としている<sup>6)</sup>。「疑誤」の注記を見る限り、呉は「青洲医談」と「灯下医談」の関係を十分に理解していなかったことが分かる。また、「青洲医談」を3巻であるとしているので、この注の「下巻」は3巻が「卷之一」～「卷之三」ではなくして「上巻」、「中巻」、「下巻」の3巻であったことを示している。この問題については後述する。

「青洲医談」を比較的正しく理解したのは関場不二彦で、1933年の著書「西医学東漸史話」中、青洲の著述についての記述で、「瘍科瑣言」、「金創秘話」（「外科神書」、「瘍科神書」の異名同書）に次いで「灯下医談」を挙げて、次のように解説している。

之（「瘍科瑣言」、「金創秘話」のこと—松木注）に次で「灯下医談、正統兩篇」又、青洲医談とも題しているといふのがある。是は前記の「瘍科瑣言」の追補とも称すべきで概して「外科正宗」の病名を主題として単簡に之が治方を其実験に抛りて記述したものである。或は「瘍科瑣言」中の内容と重複している又処々に治験例なども点綴されている。<sup>7)</sup>

これで見ると、関場は「青洲医談」と「灯下医談」（正統）は異名同書と見做して不正確な記述であるが、それ以外の記述、例えば「青洲医談」を「瘍科瑣言」の追補とする点などは部分的には正しい。「青洲医談」が何巻であるかなどの書誌については何ら言及されていないが、「灯下医談」の「正統兩篇」と同じとしているから、「青洲医談」は「二巻」ということになる。また、「青洲医談」と「灯下医談」の書写年には筆が及んでおらず、「灯下医談」は「正篇」と「統篇」で、「前

篇]、「後篇」としていないことが注目される。これらは「異名同書」の混乱の結果である。

1980年、宗田 一は「灯下医談」(前、後篇)が「近世漢方医学書集成 29 華岡青洲 (一)」<sup>8)</sup>に覆刻収載されるに際して解題を執筆したが、「灯下医談」(前篇)に掲げる病名は「癰疽」から「嵌甲疽」までは「瘍科瑣言」に収載する疾患と同じ順序であるが、治方のみを記して内容は簡単であると述べた。さらに、「灯下医談」(後編)は「青洲医談」と題名は異なるが、内容はほぼ一致する、すなわち「灯下医談」(後篇)と「青洲医談」は異名同書であるとしている<sup>8)</sup>。後述するように「灯下医談」(後篇)は単純に「青洲医談」と異名同書であるということとは出来ない。「青洲医談」が複数巻から成っているからである。上記の呉、関場、宗田 3名の研究者の誤りは、彼らのいずれも「青洲医談」の全容を把握理解していなかったことに起因している。以上が、これまでに発表された「青洲医談」に関する知見のすべてである。「青洲医談」に関しては、然したる研究が行われてこなかったと云っても過言ではない。

## 2. 「青洲医談 (二十一種本)」の書誌とその内容

「はじめに」で述べたように、本間玄調は後世

に遺すべき青洲の著述を厳選し「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」とした。したがって、これらは青洲の著述の中で最も正統で権威のあるものと考えられる。「青洲医談 (二十一種本)」<sup>4)</sup>は「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」の五・六集に収載されている。玄調は「青洲医談」ないしこれに類似した題名で流布していた諸写本を整理して2冊4巻にまとめたのである。

「青洲医談 (二十一種本)」の書誌を一括して表1に示した。書写年に関しては年紀の記述がないものの、「青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種」の編集が終了した1850年と見做して大過はない。書写者に関しては、具体的な名前は知られていないが、「青洲医談 (二十一種本)」の「巻之一」の1~19丁までの書写者と20~45丁までの書写者は明らかに異なり、前者の筆跡は「巻之三」、「巻之四」と同一と思われる。後者の筆跡は「巻之二」の筆跡と同一と考えられる。したがって、「青洲医談 (二十一種本)」4巻は少なくとも二人によって書写されたことが分かる。

「青洲医談 (二十一種本)」「巻之一」から「巻之四」の内容は表2~5に示した通りである。以下簡単に解説する。「巻之一」(表2)は、「乳岩」から始まって「瘰」,「金創」,「破傷風并瘋湿」の順序で諸疾患の治療法が記述されている。記載の

表1 「青洲医談」(二十一種本)「巻之一」~「巻之四」の書誌

巻	巻之一	巻之二	巻之三	巻之四
外題	青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種 五集	青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種 五集	青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種 六集	青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種 六集
内題	青洲医談巻之一	青洲医談巻之二	青洲医談巻之三	青洲医談巻之四
丁数	45丁	44丁	52丁	53丁
丁付	無	無	無	無
辺、界	無辺無界	無辺無界	無辺無界	無辺無界
行数	10行	10行	10行	10行
図	無	無	無	有(1図のみ)
見出し	有	無	有	無
症例の提示	有	有	無	有
処方集	無	無	無	有
疾患論	無	無	無	有
書写者	不明(AとB)	不明(B)	不明(A)	不明(A)
書写年	1850	1850	1850	1850

表 2 「青洲医談 (二十一種本)」「卷之一」の項目とその内容

項目	細目 (ゴシックとして示した項目は「見出し」で、以下に「細目」を示した.)
<b>乳岩</b>	大和五条某母の症例 纏腰風 乳岩の再発 乳岩婦人ノ経行 散聚湯, 碎岩散 大坂一婦ノ乳瘻
<b>瘻</b>	江州ノ一僧 粉瘤 脂瘤 内瘤 血瘤 骨瘤 石瘤気瘤 髮瘤 血瘤 骨瘤 浪華妓女の骨瘤 瘤ヲ治セント欲スレハ 肉瘤 腐菜 小児胎瘤 眼上瘤 眼胞菌毒 気瘤 大和五条工匠ノ瘤
<b>金創</b>	金創ヲ洗フ 膏薬ニカフレル 眼中黄色 頭ノ疵 咽喉気道ノ疵 食道ノ疵 腹部ノ疵 隔膜ヨリ上ノ疵 焼酎 陽経ノ創 陰経ノ創 突創 矢創鎗疵 鉄砲創 鉄砲ノ玉 諸創 咽喉ノ疵 手足ノ疵 金創出血
<b>破傷湿#風湿</b>	破傷風難治 塞渋反張 針治ノ術 角弓反張 越朮附ニ虎杖茎
<b>缺唇</b>	切除法 左優先 小児缺唇 麻沸 創ノ術後処置
<b>痔瘻</b>	止血難ニ対スル硫黄油, キリン血 痘疹後痔瘻, 瘰癧 翻花痔 鼻痔 口痔 痔瘻 腸痔 痔瘻ノ術後
<b>舌疽</b>	舌疽附牙癰口癰 腭ノ後, 咽喉ノ前ノ舌疽 附牙癰, 齒癰 上腭漏, 一名齒漏 口癰 一婦人五十年舌疽 紀州日高郡文右エ門ノ舌疽 舌疽上軟 舌疽ハ梅毒 懸疽風 蛙喉 舌岩 重舌 吻創 痰包 吻瘡
<b>癩疔</b>	水拔 癩疔療シテ膿 大成論
<b>微毒</b>	下疳瘡, 陰茎ニ凝結 梅毒ノ薫菜 微毒膿水 微毒デ頭上ニ凝ル者 微毒デ耳下ニ凝ル者
<b>鎖陰#鎖肛 鎖吻</b>	鎖陰ノ手術, 麻薬 浪華ノ一婦 鎖肛 結毒 駢指
<b>失榮</b>	失榮, 委中毒, 氣瘵ノ難治 和州五条駅医ノ紹介患者 氣瘵 失榮に猛升灸丹 和州一婦人, 五宝丹
<b>淋漏</b>	淋漏ト懸癰 一播州人 会陰打撲 石淋 鹿城先生ノ石淋治療 婦人石淋 一樺山諸士ノ娘ノ石淋 淋疾 血淋
<b>産後諸症</b>	産后瘵病胞衣不下 産后戦慄 産后瘵病 産后戦慄 産后血熱 産后暴瀉 産后血量 産后暈倒 産后下血 産后血虚 産后痢 子宮脱
<b>流注</b>	腫物, 越朮烏 一病者 疵瘡ノ流注
<b>瘰癧</b>	瘰癧ノ処置, 麻薬 賈氏曰瘰 吐血下血
<b>雜症</b>	三朮附ノ辨 葛根朮附 桂朮附 越朮附 痿弱 結毒 当歸芍薬散 甘草甘姜湯 小兒陰茎腫大 腫瘍塊動氣 不食 癰 小兒遺毒 蓄血下利 傷寒多汗増寒 婦人乳腫 委中毒 風眼張破 少女兩足痿弱 水庖 反鼻傷 反鼻ノ劇症 小兒解顧不治ノ症 臑毒 癩癰 没食子 反花瘡 腐菜 翻花瘡 腐菜ノ瞑眩 胸腹臑腑ニ近キ腐骨疽 眼胞, 唇ニ塊 小手返リ 腫物 走馬疔 天刑 婦人ノ頭瘡 取蟾蜍法 乾牛丸 黒子 火傷 腸痔 足ノ甲ノ附骨疽 癩疾 諸腫物 婦人陰中ノ腫 一病者ノ齶の瘤 齒唇 婦人尿道破裂 火傷痕附斑点 鼠毒 前衝 大玄 決勝 摧凶 臍風 纏蛇毒 天蛇毒 代指疽 瘰疽 甲疽 瘰疽 溺死 癰 陰狐疝 市場某発病流注 氣腫 青筋 痧病 腎囊風 阿片此水取放法 製礪砂法 嘔吐ノ劇症

順序は、必ずしも「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>の順序に従うものではない。「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>は主として疾患の病理、症状が記述の中心であったが、「卷之一」では治療法が主体となっていることが特徴で、症例も提示されている。例えば、冒頭の「乳岩」では、例の麻沸散を投与しての最初の全身麻酔下の手術患者であった大和・五條駅の藍屋 勘の症例が示されている。この症例については第11節で詳しく述べたい。記述の対象疾患は表2に示すように「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>に見られる疾患の過半を網羅しており、このことからすれば、ある期間における青洲の「瘍科瑣言」を基本にした各種疾患の治療法についての口述を簡略にまとめた記録と解釈してもよい。ただし、疾患の順序は「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>の順序とは異なって区々であり、臓器別に整然と分類されたものではない。口述を筆録した場合、例えば「卷之四」の条文の過半は「先生曰」で始まることが多いが、「卷之一」では、この句は殆ど見られず、わずかに9丁裏「先生曰破傷風ハ至テ難治也」、30丁裏「先生曰凡腫瘍塊動氣アリテ……」、44丁表「先生或日語テ日瘡病ハ……」など数条のみであり、この点、全体としてよく記述の統一が取れていることを指す。このことは、本巻の原本が単独か極めて少人数の門人によって筆録されたことを示唆している。

「卷之二」(表3)も各種の外科的疾患の治療法、処方を書いたものである。疾患記述の順序も必ずしも整然と整理された上で記されてはおらず、また、「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>の順序に従ったものでもない。諸所に青洲が口述したことを示す「先生曰」、「予」、「又曰」の語句が散見される。「卷之一」に比較して少ないものの、症例の提示も見られる。

この巻で特徴的なことは、青洲の医学、医術に関する考え方、つまり医哲学を述べた条文が散見することで、このような条文は他の巻では認められない。しかし、これらの条文から、この巻の原書が成立した時期、そして他の巻の成立との前後を推定することは容易ではない。例えば、14丁裏に「蘭人乳岩ヲ割ニ、鍛冶ノ鉄ノ如キ者ヲ以テ核ヲハサミ切取ト云リ。如是スレハ、速ニ死スル也。蘭人モ空言也。」(句読点-松木)とある。こ

れは青洲が、京都遊学中に、ハイステルの外科書中の乳房切断術の図を見たときの感想を述べた条である。乳房切断術は余りにも侵襲度が大きく、それを行えば死に至ると青洲が考えていたことが分かる。このために青洲は、以来、数年間この問題の解決法を模索して、遂により侵襲度の低い方法、つまり乳癌腫瘍摘出術を考え出したのである。このような背景を考慮すると、上記の言葉は、青洲が京都遊学中の1783、4年以降のものであり、さらには、初めて全身麻酔下に乳癌腫瘍の摘出手術に成功した1804年10月以後の言葉としても矛盾しない。いずれにせよ、「卷之二」も「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>で対象にした外科的疾患の一部について、順序不同にそれらの治療法を述べたものである。同じ項目に対する記述でも「瘍科瑣言」の記述、さらには他の巻の記述とは重複していない<sup>10)</sup>。また対象疾患も全般的であることを考慮すると、この巻は「卷之一」の口述とは異なったある期間の青洲の一連の口述をまとめたものであることが示唆される。

「卷之三」(表4)は「瘍科瑣言」に収載された疾患をほぼその順序に従って解説したものであるが、「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>では主として疾患の病理、病状が説明されているのに比較して、「卷之三」では記述の焦点は治療法やそれらに対する処方に置かれている点の特徴である。分かり易い例を示せば、例えば「火焰疔」については、「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>では「火焰疔ハ面部ニ生ス。人中ニ出ル者アリ。毒勢烈ウシテ火焰ノ如シ。其状幾ツモチョイチョイト出ル中、一点ノ紅黄小胞アリテ兎角熱毒烈シキ者ナリ。」(「二十一種本」50丁裏)と病状を記すが、「卷之三」では「火焰疔。癰疽ヲ云ヘハ疔也。口ノ知レヌ者也。其内堅ク凝テキテ居ルヲ乱刺シテ青蛇ヲ付ヘシ。陰処ニテキル者也。烟ノ様ニ紫黒クナル也。」(2丁表、いずれも句読点-松木)とある。また、「誤吞針鉄骨硬咽喉」の条については次のように記されている。

「瘍科瑣言」(「二十一種本」38丁表～38丁裏)

魚骨ノ咽ニ立タルニ、酢一合五勺ヲ五勺位ニ煎シテ服サシム。又、鶉ノ腹内ニアル虫ヲ取乾



表3 「青洲医談(二十一種本)」「卷之二」の項目とその内容

項目(「見出し」はないので、冒頭に出現する語句を採用した)				
交接	腫塊動気	肺辺ノ毒	気瘤	麻沸散後不醒
大便失栄	瘰癧	乳岩再発者	乳岩	金創ヲ洗フ
金創家嘔逆	金創家醋酒菌ノ類	釣鐘草	傷寒論ニ瘡家	虎杖茎
隔膜ヨリ上ノ疵	鉄砲薬	喘促	上消渴	
舌疽	乳漏膿汁	癩疔	諸瘡潰	腫物流注ノ状
黄疸ノ初発	浄府湯ノ腹症	喘促	白散	缺唇
胃脘癱 痲疾	走馬疔	痘	産後ノ崩漏	冷痢
白駁風	医タル者	凡ソ外科ヲ為ント	瘡瘍	一男子十二三ナル者
結毒	附骨疽	産後発癩	産后振慄	金創
泊夫藍	麻疹後痔瘻	走馬牙疔	産后崩漏	血量
産後暈倒	小指ニ爪ニツ	犬毒	肉瘤	丹毒
疽	婦人陰中腫	油風	狼毒	産后戦慄
流注	頭ノ疵	頭中ノ疵	妊娠三四ヶ月	打撲
頭ノ疵	面部ノ疵	眼胞ノ疵	日上ニ瘤	鼻ノ疵
血ノ气道ニ入リテ	腸カラ大便	腸ヲ縫フ	鹿城先生金創	
矢疵鉄砲疵	腸痔	脱血	与石斑猫巴豆烏頭	腐葉
痙病	真頭痛	胸中動悸	痔瘻	肉瘤
破敵	癩疾	小兒胎瘤	癩疾	腸痔
蘭人乳岩ヲ割ク	乳岩ヲ患ル者	癩, 中風	燒酎	
紙	金創	舌岩	木舌	自汗
舌疽	金創乳岩諸腫物	小兒胎中	痢ノ流行	附ノ附骨疽
梅癩	医タル者	医ハ宗儒ノ窮理ノ学	気虚	
瘡口	打撲	金創	痘瘡貫膿	脹満
一婦人咳	脹満	癩狂血量	金創家	吐シテ后渴スル者
十日モ経テノ疵	胸ノ疵	指ノ入疵	伊良子ハカスル、ト云	
腸ノ切離レタル者	陰茎	伏竜肝	辟糞便秘者	
天刑	癭瘤ノ初起	大頭瘟蝦蟇瘟	烏頭剂	嘔吐蛔虫
嘔吐	天行眼	風眼	癩疾眼中	淋疾
酒麩鼻	林一鳥家方	解顧	乳岩後四日目	麻沸散
藍葉解毒湯(宇田川家方)		藍葉散	淋疾	咽喉腐葉
播州村上玄齡	鉄砂	黄土湯	腫物乾キ難キ者	附子湯
方無古今唯効為良	雜病	精神困妄	小兒忽蚘變	
鷓鴣菜ノ症	一壯夫夏登金剛山	一男子腹満	神仙病	
一婦人臨産数日	琴山先生曰油風	甘草大棗湯	一男子井中ニ入	
腸陽膿未成	姜桂湯	当歸四逆湯当歸建中湯当歸芍薬散		胸脇苦満
杉山氏曰苦満	凡但一症ヲ見ス者ハ	頭痛	臀肛ヘ向テ衝様ニ痛	
無形ノ病	痘瘡発熱	梅核骨腫	鷓鴣ノ症	水気
毒箭	一男子卒然トシテ指頭ニ痛ミ		一婦人内疔	急癩
産後血量	臨産ノ時疼劇	洗薬方	墮胎振寒	小兒滞頤方
醬水	閉経一方	腸癱一方	小産ト脱血	小兒生レテ啼ク
黄疸ノ病根	疹ハ時行ノ气脉	今時多クアル霍乱	一人頭痛身熱	
真ノ癩	梅毒ニテ齒齦	脹満ト称スル蘭説	健胃煎方	痧赤游丹毒
膈噎方	十全流気飲	男	瘰癧	梅毒
腐葉	烏頭ノ瞑眩	癩	一男子十五才膝ニ創	耳輪生蛇
一人腰眼有一塊	梅毒	凡ソ子ヲ引キ出ス	包莖反花	疥癬
田虫	一男子痰疱	一婦人舌疽	諸瘡毒尽キテ不癒者	一婦人腮耳
真ノ流注	難産ニテ尿道破裂	上腭漏頭痛	陰痿	疣
閉経	留飲	吐血	乳岩療治后風	鶴膝風
打撲癡血	梅毒	生々乳	疣痔	苓桂朮日湯加附子
一女子右手ノ火傷	乳岩腐爛	真ノ舌疽	癆瘡難載者	

表4 「青洲医談（二十一種本）」「卷之三」の項目とその内容  
 （「見出し」をゴシックで示し、項目中の冒頭の語句を抄出した。一部に「見出し」を欠く項目もある。）

項目																																																																																											
癰疽	腦疽	疔	爪藤疔	火焰疔	紅糸疔針	脱疽緩症	療癰微癰真癰	鬢疽	咽喉結毒喉癰湯	急喉風	單喉風	片方風	單鷲風	乳鷲風	喉癰	附牙癰	上顎癰	上顎漏	骨槽風	牙槽風	齒漏宣露風	小兒走馬疔	舌疽	梅毒舌疽	舌瘤	重舌	木舌	痰泡	吻	瘡	滯頤	繭唇	時毒	癭瘤	肉瘤	血瘤	氣癭	肉瘤	血瘤	粉瘤	脂瘤	筋瘤	髮瘤	骨瘤	石瘤	胎瘤	失榮	虫瘤	痰瘤	肺癰	浮萍煎																																								
流血流注	敗乳	乳癰	乳岩	乳癰	乳核	乳癰	乳癰	附骨疽	多骨疽	鶴膝風	腸癰	藏毒	痔瘡	腸痔	疣痔	虫痔	脉痔	微痔	眼痔	透腸疔	耳痔	妒精瘡	膿便毒	腐肉便毒	囊癰	懸癰	淋漏	石淋	腎癰	眠疽	楊梅瘡	結毒	結毒痔瘡	婦人陰	瘡	陰痔	傷寒發頭																																																						
痢后風	癩癧	甲疽	僵螂蛙	天蛇毒	合谷毒	日蝕瘡	鶴口疽	龜泉疽	石榴疽	穿踝疽	腋癰	脇癰	鼻痔	癩風	白駁風	腦漏	鼻淵腦漏	破傷風	戰慄寒熱	杖瘡	疥癬	牙縫出血	血筋	血疔	鷲掌風	腎囊風	疥癬	膝瘡	血風瘡	頑癬	膿窠瘡	小兒遺毒	凍風	火丹	天泡	酒查	油	風	白屑風	添瘡	繭唇	藩唇	槽牙風	紫焰疔	漆瘡	瘰癧	疥癬	濕腫	咬傷	蝮蛇傷	鼠毒	風犬傷	婦人面生鰲黑斑	婦人脚氣	手足破裂	眼丹	体気	白禿瘡	奶癬	蟻拱頭	小兒遺毒	蝮蛇串	小兒痘風	小兒赤遊丹	痘后落痂	痘疔	黃	水瘡	奧田螺	牛程瘻	酸痛	陰虱	葡萄疫	誤吞針鉄骨硬	中砒毒	河豚魚毒	陰毒	委中毒	嵌	甲疽	倒睫	鎖鼻	鎖耳	缺唇	六指	駢指	鎖陰	陰門破裂	婦人石淋	男子石淋	陰狐疝
	鎖肛	火傷	打撲																																																																																								

シ置キ、末ニシテ少シ用。又、柚ノ実霜一味ヲ用テ奇妙也。喉痺及竹木刺ニ妙也。又、鳳仙白花、鬼灯、右霜ヲ酢ニテトキ用。餅ノイ咽ニツマリタルハ、胡麻油一味服サシムヘシ。又、酢ヲ濃煎シテ用ルモヨシ。鉄針ナト肉中ヘ入テ不出ハ、磁石ノ末ヲ創ロニスレハ、即時ニ拔ルナリ。（句読点－松木）

「卷之三」46丁表

魚骨ノタチタルニハ、酢一合五勺煎シ、或ハ縮砂末白湯送下。竹木刺ニハ肉中ニアルヤナシヤ疑ハシキ症ハ、左突ニ□眼ノ末ヲスリマセ貼ス。神功アリ。餅ノ咽ニツマリタルニハ、胡麻ノ油一味用。酢ヲ濃煎ニシテ服スルモヨシ。又、一術清風ノ治可也。針ノ咽ニ立チタルニハ、外ヨリナテ、処在ヲ能見定テ切り破り抜ヘシ。（□読めず、句読点－松木）

以上によって、「卷之三」の記述とそれに対応する「瘍科瑣言」の記述は同主旨ではあっても、同一ではないことが理解される。しかし、不思議なことに一卷本の「青洲医談」の各条文は殆んどが「青洲医談（二十一種本）」の「卷之一」、「卷

之二」、「卷之四」から抄出されているが、「卷之三」の条文を含んでいない。このことは「卷之三」は「卷之一」、「卷之二」、「卷之四」とは性格を少しく異にするもので、関場の見解<sup>7)</sup>のように「瘍科瑣言」の「続編」ないし「補遺」とした方が分かり易いが、このことは、「卷之三」の成立は「瘍科瑣言」の成立以前には遡れないことや他の巻よりかなり遅れたことを示唆する。

「卷之四」（表5）は、一見して他の巻と異なる記述形式を採っている。殆どすべての条文は「先生曰」で始まっており、これは青洲の口述の痕跡を色濃く反映したものと解釈される。このような記述は疾患について記述している27丁の内20丁である。この巻の前半の疾患の条文の中には、「卷之一」、「卷之二」の条文と同一主旨を述べたと思われる数条が含まれている。例えば「卷之四」の冒頭に「先生一日語曰。先（「失」の誤記－松木）榮、氣癭、委中毒ノ如キ者ハ至テ難治ニシテ、予モ未発覚スル事非ス。又、治術ノ如何トモスヘキナシ。子輩モ其形状ト症候トヲ能知テ、右等ノ病タル事ヲ失フ事ナケレハ、危ナラサルト言フヘシ。以下略」（1丁表）とあるが、「卷之一」の「失榮」の項では「先生嘗塾生ニ語テ曰。失榮、委中

表5 「青洲医談(二十一種本)」「卷之四」の項目とその内容(「見出し」がないので、各事項の冒頭の語句、文章を示した。)

先生一日語曰失榮氣癱委中毒ノ如キ者ハ	子宮脱ヲ入ル、ニハ
消渴病ニ先生七味白朮散ノ方	不食癩ニ抑肝脾湯ニ
先生曰蓄血下利ノ証ニ	先生曰傷寒多汗寒被ヲ近クレハ
先生曰婦人乳腫痛スル者ヲ治スルニ	先生曰委中毒ノ状ハ
先生曾テソツヒルヲ水膏ニ製シ	友人問先生曰七八歳ノ処女
又曰石淋ハ会陰ニ滯ルモノニ	手足ノ疝動血脈ニ当リ出血スルトキ
膏藥ニカフルハ人アリ	先生曰金創家ニ眼中黄色ヲ
先生曰顔ノ疵ハ手早く洗ヒ	眼胞ノ疝ニ前衝ヲ用ル寸ハ
先生曰咽喉ノ氣道ノ疵少シナレハ	先生曰凡モノハ痛ト云ハ
先生曰破傷瘋ノ事證治準繩ニ見ヘタリ	先生曰破傷風ニテ角弓反張する者
先生曰三消渴ヲ加ル法ハ	先生曰腐牙癰口癰舌疳ノ三証ハ
先生曰痔瘻ヲ割テ	先生曰腐菜ノ膜眩ハ
先生曰失榮ハ不治也	眼胞或唇辺ニ塊アルハ
先生曰癩病ノ初発ニキクキクトシテ	先生曰橘皮上大黃湯癬瘡ヲ
夏月瘡瘍ニ虫ヲ	□病瘡ヲ患ル人陰茎ニ(虫食)
先生曰世ニ懸癰ト称スル者	懸癰(これは「見出し」になっている)
高野山ノ一僧此症ニテ	先生曰癰は先キリイル腐リテ
青蛇ハシメル処ノ効アリ	先生曰天刑ニ灸治出血温泉ノ
先生曰腐菜ニテ瘤ヲ治スル	先生曰風眼張破シテ出血不止者
先生曰婦人久シク頭瘡ヲ患フ	先生曰微毒ナトシ
痔瘻ナトノ大患ヲ治療セント	先生曰瘤ヲ治セント欲セハ
麻沸散眠眩甚シテ不醒者ハ	先生曰后小水自利スル者ハ
先生曰甘草乾姜湯ハ	先生曰痔瘻ヲ切テ後テ疼痛ヲ
先生曰痔瘻氣血虚シテ新肉難生者ハ	又曰金創家上盛ニシテ
先生曰陽経ノ創ハ易治	先生曰難産之后小腹ニ塊
先生曰産后血熱心胸ニ迫テ	又曰産后暴瀉スル者アリ
先生曰麻薬ハ散ニシテ用ユレハ	先生曰散薬ハ二銭用テ能眩眩ス
又曰麻薬ハ諸書ニ出タリ	先生曰和歌山ノ者ヲ療ス
放平膝蓋骨不動者ハ	火傷ニテ膝臂杯引付タル者
癩ハ決テ針スヘカラス	ネルホノ屈伸出来サルヨウニ
先生曰腫物重テ痛ヲ発スル者ハ	又曰脱疽痛者ハ未腐也
又淋疾小便自利スル者ハ	又曰腐ハキリイル先腐テ
又曰市場布屋新四郎年六十余	又曰穴伏ノ寺僧先年疽を發ス
又曰腹癰ハ大ニ腐ル也	先生曰乳岩ヲ患ル婦人経行ナキ様
又曰膏ニカフレテウム時ハ	又曰膏薬ノ取様ハ出血多キ筋ナレハ
又曰人仰臥シテ自然ト	又曰余嘗テ痔瘻ヲ治スルニ腐菜ハセツトン
又曰京師岩長家ニテ痔瘻ニ用ル腐菜ハ	又曰或去歲ヨリ腸痔ヲ病者アリ
又曰陽虚ノ事汝ニ明ニ語ラン	又曰結毒ニテ首ノ痛者ニ
先生曰泊夫藍ノ用様	又曰カスカイ膏ニ用ル饅頭粉ハ
カスカイハ張付テ能ク乾ク迄	又曰金創ニテ氣道ノ血杯
又曰突疵一寸ノ疵ナレハ	又曰腸ニ疵付手切レ離レタル者ハ
又曰突疵ハメイチャニカフルモノハ	又曰鉄砲ノ玉不取時ハ
又曰人油ハ近年大阪難波ノ穢多ノ方ニ	又曰眼胞ノ疵ニ前衝ヲ
又曰カラアンスナータヘルナータ	又曰頭有疵者先髪ヲ切去テ
又曰頭ニ疵アル者脳水鼻ヨリ	又曰額ニ疵一寸位ノモノハ
又曰眼胞疵アル者細キ糸ヲ	又曰瞳子ニ疵有者ハ
先生曰氣道は前ニアリ	又曰疵隔膜ノ上ニアル者ハ
又曰腹ノ疵ハ臟腑ニ近シ	又曰突疵一寸以上ハ
又曰腹ノ疵紅ヲ用レハ	舌疽深ク穿潰シテ
血瘤杯ニ唐アンスコウヲサスニ	四物解毒ハ黃連解毒湯四物湯ノ合方也
凡疔毒ハ他ニ別異ナシト	骨瘤ハ額又ハ頬辺ニ多ク生スルナリ
治耳聾薬	取蟾酥方
吉雄ニテハ面部疵ハ	乳岩其塊物ヲ取シ后ハ金創家ノ
石淋ハ龟头ノ通路セマクナリテ	治遺精方 谷川博
首頸辺ニ発スル腫物漫ニ	琥珀ヲ柔ニスル方
又堅苦スル方	治百薬膜眩方
夫患疫之初起発熱寒医与葛根湯汁	一夫腹滿不大便承氣ヲ与ル事
梅家骨腫ト云モノ	鷓胡ノ症ハ腹診甚タ見著也
鷓胡菜痔瘻ノ解ノ効アリト	梅毒ニ耳下杯ニ癰血シ破敵ノ類
或人以前肥癰ヲ患ヒ	辰砂ハ火ニ当テルト
痔瘻后衝ヲ付ル前位ニハマクリヲ焼キ	鼻痔大ナル者且取リ難キ者ハ
麻薬煎法酒一合半水一合半	膏薬衣類ニ付クモノ
ノフスマト云ハ一ニハントリト呼フ	一男子印堂ノ処ニ黒子アリ



## 紮綿法

- 第一法 称ハ製半幅二尺三寸，第二法ノ畧法ナリ  
 第二法 称双卷半幅四尺余桂木綿半幅二尺五寸（呉の著書の図第二百二十四—松木注）  
 第三法 称咽卷半幅四尺（呉の著書の図第三百十一—松木注）  
 第四法 称頭鼓半幅九尺（呉の著書の図第二百三十一—松木注）  
 第五法 称袈裟卷本幅八尺（呉の著書の図第三百三十一—松木注）  
 第六法 称腋卷不幅七尺（呉の著書に図なし—松木注）  
 第七法 称腹鼓本幅一丈五尺（呉の著書の図第二百二十九—松木注）  
 第八法 称背鼓本幅一丈八尺（呉の著書の図第二百二十七—松木注）

## 治術

- 第一法  
 第二法  
 第三法  
 第四方

## 鎖肛

## 鎖陰

## 六指

以下7丁半に涉って処方以下のように列記されている。用法を省略す。

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 五應散 治打撲 此方秘録中ニアリ畧ス     | 治脚氣衝心方                |
| 急驚風發熱直視上竄嘔吐手足厥冷者       | 治白駁風奇方                |
| 又方                     | 治癭瘤方 海藻熱湯洗            |
| 颯鼠一方 是則春林軒用方也          | 咬傷解毒丸 治犬鼠咬傷           |
| 黒痣ヲ拔方                  | 消岩散 治乳結核者             |
| 處石丸 治耳聾                | 鷲掌風薰葉                 |
| 鉄砂散 治黃胖                | 治白駁風 コレハ頭髮白クナル者ナリ。以下畧 |
| 通便閉奇方                  | 凍風奇方 シモヤケ             |
| 通小水方                   | 三品散 治翻花瘡              |
| 乳香散 乳不出者奇方             | 奇方 治骨槽風               |
| 生髮之方 前出畧               | 治血淋方                  |
| 治蝮蛇咬傷                  | 大同神功散 方秘録末ニ出。以下省略     |
| 万金丹                    | 鼻内小瘡出痒痛スル者            |
| 溺死 硫黄ノ末口鼻ヨリ吹入          | 又方                    |
| 又方                     | 又方                    |
| 又方                     | 脉痔ノ油葉                 |
| 治喘滿欲死者                 | 治療蘇初起痛不可忍妙方           |
| 吐血妙方 經驗                | 打撲奇方 經驗               |
| 石淋方                    | 淋痛不可忍者                |
| 治病犬咬毒及反鼻咬傷一切毒螫方 秘録に出方畧 | 治馬咬傷方                 |
| 治臙瘡方 方出前               | 生髮方                   |
| 又方                     | 吐血百藥不効者               |
| 治痰咳百藥不効者方              | 治重舌及口中諸病方 前に出畧ス       |
| 八味生姜丹方 前に出畧ス           | 治乳腫及嚙乳潰爛者方 前に出畧ス      |
| 齒痛含藥                   | 一粒金丹                  |
| 一粒金丹 病病第一之妙藥           | 脱肛痛甚 傳藥 大坂順貞傳         |
| 治衄血                    | 無子者ニ用                 |
| 婦人毎月経行之時服方 同方          |                       |
| 徽治談 (8丁半)              |                       |
| 霍乱治談 (5丁)              |                       |

毒，氣瘰ノ如ク至テ難治ニシテ，予モ未タ発明スル事ナシ。又，治術ノ如何トモスヘキ事ナシ。子カ輩，其形状ト証候トヲヨク知テ語ル事ナカレ。以下略」（20丁裏～21丁表）とある。この部分に関して極めて酷似しているが，これに続いて提示される症例に関しては，「卷之四」では「十二，三年前橋本積（「駅」の誤記—松木）ノ工医某ナル者」とあるが，「卷之一」では「二十二歳以前，和州五條駅医工某ナルモノ」（21丁表）と

あって全く異なる。書写の繰り返しによって，誤りが増幅された典型であろう。間違ひされないうような駅名が誤記されていることを考慮に入れると，これだけでは，いずれが誤っているか判断しかねる。あるいは，青洲が記憶違いによって誤って口述した可能性も否定できない。

「卷之四」は，27丁裏から29丁裏にかけて，包帯法と整骨法が記述され，30丁，31丁は「鎖肛」，「鎖陰」，「六指」3疾患の記述に充てられて

いる。32丁表から39丁表までは54の処方が列記されている。阿片を主成分とする「一粒金丹」の処方2種（この中の一つは「津軽一粒金丹」<sup>11,12</sup>）と全く同一の処方である）が含まれているが、麻酔薬は披見されない。40丁表から48丁表までは「黴治談」、49丁表から53丁裏までは「霍乱治談」である。したがって、この巻の構成は専ら外科疾患の治療法を記述している「巻之一」～「巻之三」とは大いに異なることが理解される。巻の前半は他の巻と同じ外科的疾患についての口述という形態であるが、後半は処方、疾患論を含んで他の巻と構成が大いに異なり、このことはこの巻の後半が後に追加されたことを推測させる。

上に述べた4巻の内容だけからは、各巻の成立年代の前後関係を明らかにすることは困難であるが、いずれの巻においても、「瘍科瑣言」に見られる疾患の多くが繰り返し言及されていることは注目すべきことであり、これは、各巻それぞれが、単年ないし複数年における青洲の口述をまとめたものであることを示すものであろう。

### 3. 「青洲医談」は当初何巻だったのか

前述したように1861年に佐藤持敬が「華岡氏遺書目録」<sup>2)</sup>を編集した時、春林軒に所蔵されていた「青洲医談」は「淡海 稲惟家」が筆記した「上、中、下」の3巻であった。しかし、現在、「青洲医談」の「上巻」、「中巻」ないし「下巻」と題する三巻本やその残巻は知られていない。これより11年前の1850年に本間玄調は「春林軒二十一種」を選定したが、その中に収載された「青洲医談（二十一種本）」は「巻之一」から「巻之四」までの4巻本であった。この4巻本が、玄調が編集する以前から「四巻本」として存在しており、玄調がそれぞれ複数の写本から善本を選んで選定したとは考えられない。というのは、もし、そうであるとすれば、少なくとも「青洲医談 巻之一」～「青洲医談 巻之四」と題する写本が存在するはずであるが、そのような写本ないしは残巻が、現在一本も知られていないからである。このことは、「青洲医談（二十一種本）」は、玄調が「青洲医談」ないしその類書を整理して4巻本とした

ことを強く示唆する。

恐らく、青洲の口述を筆記した「青洲（先生）医談」、「青洲（先生）医話」、「灯下医談」などと題する内容が近似している数種の写本が存在していたので、玄調がこれらを整理して現在見る形の4巻本にまとめたのではなかろうか。なぜ4巻本でなければならなかったのかは、今となっては知る由もないが、次節で述べる淡海（近江）の稲惟家の筆録になる4巻本（ただし「巻」の文字は使用されていない。）の「青洲医談」の存在も無視することが出来ないと思われる。以上の推察は、現在「青洲医談」ないしはその異名同書として披見される写本の殆どが一巻本であることによって傍証されよう。いずれにせよ、「青洲医談」は当初から4巻として存在したのではないことは確かである。

### 4. 「青洲医談」の成立年代

前節で述べたように、「青洲医談」は1850年に本間玄調によって4巻本に整理編集された。しかし、その編集の経緯の詳細については全く知られるところがない。現在知られている最も古い「青洲医談」の写本は東京国立博物館に所蔵されている1巻本の「青洲先生医談」（内題も同じ。請求番号QB-530）である<sup>13)</sup>。四つ目綴じ、無辺無界の38丁の写本である。識語によって書写者は「黒田慎」、書写年は「文化十三年（1816）二月三日」である。「青氏開萬冊府之記」、「青山求精堂蔵書畫之記」の印などがあり、森 立之、立之の弟子である青山求精堂の旧蔵本であったことが知られる。書写者の「黒田」についてであるが、この写本には「春林軒」の門人とは明記されていないが、著者がこれまでに閲覧した文化・文政期に書写された写本は過半が門人かその子弟による。このことを考慮すれば、1816年に書写された本写本は門人によると見做してもよい。春林軒の門人とすれば、黒田姓の門人は3人で、1816年に「青洲医談」を書写することが可能な門人は、1812年（月日不詳）に備中から入門した「黒田玄節」と1815年4月3日に入門した河内の「黒田元慎」の2名に限定される<sup>14)</sup>。名に「慎」の文字が付くこ

とや書写は入門してから比較的早期に行われることを考慮すると、書写者の「黒田慎」は「黒田元慎」と考えても誤りではあるまい。いずれにせよ、「青洲医談」と題する写本は「黒田(元)慎」が1816年2月までに謄写していると考えられるので、この時までには出来上がっていたことは間違いない。この写本を以下書写者に因んで「青洲医談(黒田本)」と称する。

「青洲医談(黒田本)」の内容は以下の通りである。全体が4部に分かれているが、「卷之一」、「卷之二」などとはなっておらず、それぞれ丁を改めた本文冒頭に「青洲医談」とあるのみである。仮にこれらを「青洲医談(黒田本)」「卷一」～「青洲医談(黒田本)」「卷四」とする。それらの内容を簡単に示せば次の通りになる。

- 「青洲医談(黒田本)」「卷一」(1丁表～7丁裏)：  
「青洲先生曰麻薬ハ散ニシテ用ユレハ勢強クシテ早く瞑眩スル也」から「先生曰喘息ニ控涎丹五分を与テ効アリ」までの52条。
- 「青洲医談(黒田本)」「卷二」(8丁表～16丁表)(16丁裏は空白)：  
「先生曰頭有疵者早洗而可縫也」から「先生曰乳漏膿汁久シク不尽シテ難癒者ハ」までの69条。

「青洲医談(黒田本)」「卷三」(17丁表～28丁裏)：  
「先生曰手足ノ痲動血脉ニ当り出血スル寸」から「先生曰産后暈倒スル者ハ孤風散ヲ与フヘシ」までの68条。

「青洲医談(黒田本)」「卷四」(29丁表～38丁表)：  
「先生曰余嘗真頭痛與芎芷香蘇加石羔荆芥細辛」から「突疵メイチャニカフル、者ハ金瘡油ニ椰子油ヲ練交入ヘシ」までの53条。

「青洲医談(黒田本)」「卷一」～「青洲医談(黒田本)」「卷四」は「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」～「卷之四」と直接的に対応するものではない。分量的にも黒田本は併せて38丁であり、「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」～「卷之四」の45丁、44丁、52丁、53丁のそれぞれ一冊分に過ぎない。しかし、「青洲医談(黒田本)」の各部分は、それぞれある特定の疾患のみについて記述したのではなく、疾患全体を網羅している。このことは、それぞれがある期間の青洲の口述を筆録したものであることを強く示唆する。また、表6に示すように、「青洲医談(黒田本)」「卷一」～「青洲医談(黒田本)」「卷四」の各条文が「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」、「卷之二」、そして「卷之四」の疾患の記述の基本を構成していることが明らかである。「青洲医談(二十一種本)」の「卷

表6 「青洲医談(二十一種本)」の各巻に見出される「青洲医談(黒田本)」各巻の条文数

	「青洲医談(二十一種本)」					小計
	卷之一	卷之二	卷之三	卷之四		
「青洲医談(黒田本)」	卷一*	7 <sup>a</sup>	15	0	28	50 <sup>b</sup>
	卷二**	28	26	0	22	76
	卷三 <sup>+</sup>	14	30	0	30	74
	卷四 <sup>++</sup>	1	34	0	14	49
						計 249

\*: 52条文中5条は「青洲医談(二十一種本)」中に見出されなかった。

\*\* : 69条文中5条は「青洲医談(二十一種本)」中に見出されなかった。

+ : 68条文中1条は「青洲医談(二十一種本)」中に見出されなかった。

++ : 55条文中5条は「青洲医談(二十一種本)」中に見出されなかった。

a : 「青洲医談(二十一種)」の「卷之一」には「青洲医談(黒田本)」の「卷一」からの7条文が認められることを示す。「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」、「卷之二」、「卷之四」はそれぞれ「青洲医談(黒田本)」の全巻から引用されており、これは「青洲医談(二十一種本)」の成立の複雑さを物語る。

b : 「青洲医談(二十一種本)」の各巻間に同主旨の文章が数箇条認められ、ここでは重複して計算している。つまり、例えば「青洲医談(黒田本)」「卷一」は全部で52条あり、このうち5条文は「青洲医談(二十一種本)」に見出されないものであるから、「青洲医談(二十一種本)」に披見される「青洲医談(黒田本)」からの条文の小計は52-5=47となるはずであるが、重複した条文があるから小計が50となっているのである。

之三」は前述したように「卷之一」,「卷之二」,「卷之四」とは少し性格が異なっているので「青洲医談(黒田本)」から引用された条文を含んでいない。このことは、「青洲医談(黒田本)」を基礎にして、「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」,「卷之二」,そして「卷之四」の基となった写本が作られたことを示す。

早川賢造が1827年に書写した「青洲医談」<sup>15)</sup>は1冊4巻本の写本で、識語によれば「門人稲惟家」が青洲の口述を筆記したものだという。目録には「4巻本」とあるが、「巻」の文字が使用されているのではなく、4部に分かれており、それぞれに丁が改められて内題と青洲の口述の筆記者名が次のように記されている。最初は「青洲先生談 門人 淡海稲惟家筆記」(7丁)、次は「青洲先生談 門人 淡海稲惟家伯達識」(10丁)、その次は「青洲先生談 門人 淡海稲惟家筆記」(14丁)、最後は「青洲先生談 門人 淡海稲惟家伯達識」(11丁)となっている。混乱を避ける意味で写本を「青洲医談(早川本)」とする。「淡海稲惟家伯達識」の記述があることから見れば、本文が殆んど同じなので「青洲医談(早川本)」は「青洲医談(黒田本)」よりも稲 惟家の稿本に忠実な写本であると言えよう。

この「稲 惟家」は佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>2)</sup>にも「淡海稲惟家」とあるので、出身は「近江」であることが分かる。「近江」出身の春林軒門人で「稲」姓の字が付く人物は「文化九年(1812)三月二十三日」に入門した「稲川梁策」のみである<sup>16)</sup>。姓名を三字で書くことは珍しくなく、例えば慶応大学富士川文庫所蔵の「瘍科瑣言」(請求番号DIG-KEIO-646)には「播 三 敬節撰 / 淡 小 輞庵校」とあって、撰者、校者共に姓名は三字である。「播 三 敬節」は播磨の「三輪敬節」の略であり、「淡 小 輞庵」は淡路の「小川輞庵」の略である。姓が一字に省略されている。このことを考慮すると「稲」は「稲川」の略と見て差し支えない。「稲川梁策」は華岡塾で塾頭を務めたこともあるが<sup>17)</sup>、その経歴の詳細は明らかではなく、稲川が「惟家」「伯達」を称したかはまだ判然としないが、いずれにせよ、「近

江」の門人で「稲」字の姓名を持つ人物は「稲川梁策」しかいない。稲川は1816年11月23日に青洲から免状を下付された<sup>18)</sup>。このことを考慮すると、稲川が1812年3月に入門してから免状を貰う1816年11月までに行われた青洲の口述を筆記したのが「青洲医談(早川本)」と推察される。「青洲医談(早川本)」の構成と内容は、もちろん、書写上の些細な違いが認められるものの「青洲医談(黒田本)」「巻一」~「巻四」と同一である。つまり、稲川の「青洲医談」は黒田が書写した1816年2月までには成立していたことになる。稲川の在塾時期、つまり口述筆録時期と黒田の書写時期との間に矛盾は認められない。

内藤記念くすり博物館・大同文庫所蔵の「青洲先生医談」<sup>19)</sup>は1冊本であるが、3部に分かれており、各9丁、11丁、11丁である。それらの内容は「青洲医談(早川本)」の「巻一」,「巻二」,「巻三」と同一である。本文のみならず、各部の冒頭の記述「青洲先生談 門人 淡海稲惟家筆記」,「青洲先生談 門人 淡海稲惟家伯達識」,「青洲先生談 門人 淡海稲惟家筆記」も全く同一である。すなわち、この写本は「青洲医談(早川本)」の内、3部までの写本を書写したものである。推測になるが、佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>2)</sup>に記述された「青洲医談 淡海稲惟家筆記 下巻或名二丁下医談後篇... 疑誤 三巻」<sup>6)</sup>は、この3部(巻)本と同種の写本であった可能性が高い。以上のことから、現在の知見では「青洲医談」の原型は1812年3月から1816年2月の間に成立したと推測される。「門人 淡海稲惟家筆記」の記述を欠いた写本を1816年に書写して出来たのが「青洲医談(黒田本)」であり、「稲惟家」による稿本を書写したのが「青洲医談(早川本)」であるが、稲川自身の稿本の存在は現在のところ知られていない。

杏雨書屋所蔵の「青洲先生医談二巻 続医談残一卷存第二巻」<sup>20)</sup>は1863年に書写された比較的新しい写本で、形の上では「四巻本」であるが、「乾」,「坤」に分かれており、実質的に「二巻本」である。「乾」は「青洲医談(二十一種本)」の「巻之一」と同じであり、「坤」は「巻一」と「巻二」に分かれており、「青洲医談(二十一種本)」の「巻



一」,「卷二」,「卷四」,その他から条文を抄出したものである。したがって書誌学的価値は低いと言わざるを得ない。

稲川梁策のような塾頭を務めるだけの学力のある人物が、引き続いて青洲の口述をまとめて、「青洲医談（黒田本）」以外の巻（必ずしも順序は特定できないが）、ないしは各巻に更なる条文を追加したと推察される。それらが取捨選択されて「青洲医談（二十一種本）」の基となった写本が成立したのであろう。このことを示唆する好例がある。稲川より後に塾頭を務めた安田孝平は青洲の口述を筆記した「青洲先生治験録」を作った<sup>21)</sup>。疾患毎に症例が提示されて治療法が述べられている。収載されている疾患は「金創」、「合谷之金創」、「牛之崩漏」（これは人の疾患ではない）、「舌疽」、「骨瘤」、「菌毒」など49疾患に及んでいる。疾患の順序は必ずしも「瘍科瑣言」や「青洲医談（二十一種本）」（卷之三）に従うものではない。記述の形式は「青洲医談（二十一種本）」（卷之一）や「青洲医談（二十一種本）」（卷之四）では症例の紹介が点綴している程度であったが、「青洲先生治験録」<sup>21)</sup>ではすべてが症例の提示であるといっても過言ではない。これがいつ成立したかは明確ではないが、本文中に「乳岩三発之証」として、松原元碩の妻が乳癌の手術を「文政十三年（1830）三月二日」に受けて、術後まもなく死亡したこと<sup>22)</sup>が述べられているから、1830年より後に出来たことは間違いない。安田の「青洲先生治験録」<sup>21)</sup>は内容的にも分量的にも「青洲医談」の続編と見做してもおかしくない。恐らく、安田のような人物が、既存の「稲惟家」が筆録した「青洲医談（黒田本）」あるいは「青洲医談（早川本）」の各巻（部）にさらなる条文を追加補充し取捨選択して、現今見られる「青洲医談（二十一種本）」の「卷之一」、「卷之二」、「卷之四」が出来、そして新規に「卷之三」が成立したのであろう。

## 5. 「青洲医談」の写本の系統

著者がこれまで調査した51本の写本を一括して示したのが表7である。「青洲医談（二十一種本）」以外は50本である。この内、複数巻の写本

は16, 18, 21, 32, 44であるが、21, 32, 44は前節で述べたように同系統の写本である。16は1869年の大竹土達の書写による写本で、目録には「二巻」となっているが、2部に分かれており、共に内題は「青洲先生医談」であり、本文には「卷一」、「卷二」などの文字はない。内容は各巻からの抄出したものである。この写本の「卷一」に相当する部では末尾に「小児瘍科」、「中毒」、「麻薬」、「腐薬」、「膏薬」、「瘍科雑話」が付されており、例えば「麻薬」は4巻本の各巻に散見する麻薬関連の条文を一か所にまとめたものである。「卷二」に相当する部においても諸巻からの抄出に加えて「女科」、「小児」、「丸散法考」、「薬能」などの項が付け加えられている。したがって、この写本は明治期に書写されたことに加えて、他とは一線を画する異質な写本である。18については前節で述べた。

上記の複数巻を除いたいわゆる「青洲医談」の一卷本は計45本であるが、Aの系統（=A, ≡A, Aの抄本を含む）は18本、A, B, Dの系統は10本、A, Dの系統は2本、B, Dの系統は6本、Cの系統（Cの抄本を含む）は8本、Dの系統は1本であった。一卷本の40%は「青洲医談（二十一種）」の「卷之一」の写本で、他は「卷之一」を含む諸巻からの抄出本であることが分かる。「灯下医談」の過半は「青洲医談（二十一種本）」の「卷之三」を改題したものである。

## 6. 「青洲医談（二十一種本）」と「瘍科瑣言」の関係

第1節で述べたことで分かるように、これまでに「青洲医談」が「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>とどのような関係にあるのかについては論じられてこなかった。第2節において、『「卷之三」は『瘍科瑣言』に収載された疾患をほぼその順序に従って、解説したものである』と述べたが、その内容についてももう少し詳しく述べてみたい。

「瘍科瑣言」には、概ね「外科正宗」<sup>23)</sup>に準拠して114疾患が取り上げられて、それらの病態、症状が述べられているが、この中でどれくらいの疾患が「青洲医談（二十一種本）」の「卷之三」で取



表7 「青洲医談」の各写本の系統

題名	巻数	所蔵先・文庫名	請求番号	系統*
1. 青洲医談(春林軒二十一種五集)	巻之一	杏雨書屋	杏 3169	A
2. 青洲医談(春林軒二十一種五集)	巻之二	杏雨書屋	杏 3169	B
3. 青洲医談(春林軒二十一種六集)	巻之三	杏雨書屋	杏 3169	C
4. 青洲医談(春林軒二十一種六集)	巻之四	杏雨書屋	杏 3169	D
5. 青洲医談	一卷	京都大学・富士川文庫	ハ/84	← A, B, D
6. 青洲先生医談	一卷	京都大学・富士川文庫	セ/47	← A, B, D
7. 青洲先生医談	一卷	京都大学・富士川文庫	セ/48	= A
8. 青洲先生医談	一卷	京都大学・富士川文庫	セ/49	← A, B, D (21の抄本)
9. 青洲先生医談	一卷	京都大学・富士川文庫	セ/50	= A
10. 青洲医談(「青洲先生医譚」と合冊)	一卷	京都大学	7-02//セ//38	← B, D
11. 青洲先生医談	一卷	早稲田大学デジタルライブラリー	ヤ 09 00523	← A, B, D
12. 青洲先生医談	一卷	早稲田大学デジタルライブラリー	ヤ 09 867	= A
13. 青洲先生医談(「乳岩準」などと合冊)	一卷	慶應義塾大学	90-202-1	= 10
14. 青洲先生医談	一卷	国会図書館	特 1-1578	= 10
15. 青洲医談	一卷	国会図書館・白井文庫	特 1-302	← A, B, D
16. 青洲花岡先生医談	一冊二巻	国会図書館	244-230	← A, B, C
17. 青洲先生医談	一卷	宮城県立図書館・小西文庫	494セ-1	← A, B, D
18. 青洲医談(「青洲先生医談」乾之巻)	一卷	杏雨書屋	杏 3799	≒ A
19. 青洲先生医譚(「鹿城先生医譚」と合冊)	一卷	杏雨書屋	杏 2536	← A, D
20. 青洲先生医話	一卷	杏雨書屋	乾 4251	≒ A
21. 青洲医談	一冊四巻	杏雨書屋	乾 4253	= 44 (← A, B, D)
22. 青洲先生医談	一卷	杏雨書屋	乾 4266	← A, B, D
23. 青洲先生医談	一卷	杏雨書屋	乾 4267	← A, B, D
24. 花岡先生医話(内題は「青洲先生医談」)	一卷	杏雨書屋	乾 4255	← B, D
25. 青洲先生医話(「花岡先生医話」に合冊)	一卷	杏雨書屋	乾 4255	≒ A
26. 青洲先生医談(「蘭軒医談」などと合冊)	一卷	杏雨書屋	杏 579	≒ A
27. 青洲先生医談(「蘭軒医談」などと合冊)	一卷	杏雨書屋	杏 3800	≒ A
28. 青洲医談	一卷	杏雨書屋	乾 4257	≒ A
29. 青洲医話	一卷	杏雨書屋	乾 4258	≒ A
30. 青洲先生医談	一卷	くすり博物館	TO185	≒ A
31. 青洲先生医談	一卷	くすり博物館	32393	← Aの抄本
32. 青洲先生医談	一冊三巻	くすり博物館	60394	= 21.(但し巻四欠)
33. 青洲先生医談(破本本文9丁のみ)	一卷	くすり博物館	32609	← A, D
34. 青洲先生医談	一卷	くすり博物館	33035	≒ A
35. 青洲医談	一卷	くすり博物館	32398	≒ A
36. 青洲医談(蘭軒医談)などと合冊)	一卷	くすり博物館	05001	≒ A
37. 青洲医談	一卷	くすり博物館	32624	= 10
38. 青洲先生医談(「前篇」とある)	一卷	くすり博物館	36750	≒ A
39. 青洲先生医談(「松岡子俊写外科医書」に合冊)	一卷	くすり博物館	31667	≒ A
40. 青洲花岡先生医談	一卷	研医会図書館	2010	← B, D + α
41. 春林軒雑記	一卷	研医会図書館	3441	← A, B, D
42. 青洲翁医談	一卷	研医会図書館	3504	← A, B, D
43. 青洲医話	一卷	研医会図書館	3505	= A
44. 青洲先生医談(デジタルライブラリー)	一冊四巻	国立東京博物館	QB-530	→ A, B, D
45. 青洲先生医話(デジタルライブラリー)	一卷	国立東京博物館	QB-7429	≒ A
46. 灯下医談	一卷	杏雨書屋	乾 4273	≒ C
47. 灯下医談	一卷	杏雨書屋	乾 4274	≒ C
48. 灯下医談	一卷	くすり博物館	61463	≒ C
49. 灯下医談	一卷	くすり博物館	32242	≒ C
50. 灯下医談	一卷	くすり博物館	34274	≒ C
51. 灯下医談	一卷	くすり博物館	36244	≒ C
52. 灯下医談	一卷	くすり博物館	36750	≒ C
53. 灯下医談	一卷	くすり博物館	30598	← D
54. 灯下医談	一卷	研医会図書館	2901	Cの抄本

## 記号の説明

= : 条文はほぼ(95%)同一である。

≒ : 条文の約75%は同一である。

→ : 基となった条文を含む。

← : 条文は部分的に同じであるが、それ以外の写本からの引用もある。

抄本 : 抄出したもので、他からの引用を含まない。

り上げられたかを示したのが表8である。114疾患中88疾患(77.2%, 88/114)が言及されており、このことは「青洲医談(二十一種本)」の「卷之三」は他の巻以上に「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>に準拠して成立したものであることは理解されよう。もちろん「卷之三」の丁数は52丁で、「瘍科瑣言」(二十一種本)の92丁の約半分であるが、その解説は治療法や処方方が簡略に述べられているので、門人にとっては甚だ有用な著述ではなかったかと推察される。しかし、前節で述べたように、現在多く見られる一卷本の「青洲医談」、つまり抄本的写本が作られた際、「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」、「卷之二」、「卷之四」からは条文が引用されているのに対して、「卷之三」からはその条文が全く引用されなかったことは、「卷之三」が「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>とほぼ同一の著述と誤解されたために引用されなかったか、多くの「青洲医談」の抄本的写本が作られた時までには「卷之三」が成立していなかった可能性がある。現時点ではいずれとも決し難い。

## 7. 「青洲医談(二十一種本)」と「燈下医談」前編との関係

「燈下医談」(前編)も「青洲医談」と異名同書と言われてきたが<sup>8)</sup>、これも部分的に誤りであり、「青洲医談」そのものではなく、「青洲医談(二十一種本)」の「卷之三」と異名同書ともいべき関係にある。「青洲医談(二十一種本)」(卷之三)と「燈下医談」前編(大塚本)を比較すると、ほとんど同じで、二、三の疾患において順序が異なっているだけである。「青洲医談(二十一種本)」の「卷之三」の末尾に記述されている「火傷」と「打撲」の項は「大塚本」には見られない。総じて「燈下医談」前編(大塚本)の方が、疾患の見出しも分かり易く記載されており、この点、「青洲医談」(卷之三)は同じ段落の中に「見出し」とすべき疾患名が記されて、甚だ読みにくい。書写に熱心な余り、この点に配慮しなかったのであろう。したがって「青洲医談(二十一種本)」(卷之三)と「燈下医談」前編(大塚本)は異名同書である。現在知られる「燈下医談」の最も古い写本は1836

年に書写されているので、これを考慮すれば「燈下医談」前編・後編は、青洲が没した1835年後に「青洲医談(二十一種本)」(卷之二)と(卷之三)を編集改題して成立したと推測される。

## 8. 「青洲医談(二十一種本)」と「燈下医談」後編との関係

前述したように宗田は、「後篇(「燈下医談」の後篇)のこと—松木注)は『青洲医談』の題名のもと順序は違うが内容はほぼ一致する。」<sup>8)</sup>とした。つまり「青洲医談」と「燈下医談」(後篇)(大塚本)は異名同書であるとした。これは部分的に誤りである。宗田は「青洲医談」を一卷の著であると誤解している。「燈下医談」(後篇)は「青洲医談(二十一種本)」の一部、つまり「卷之二」と異名同書なのであって、「青洲医談」と異名同書なのではない。繰り返すが、「青洲医談」の写本の殆どは一卷本であり、「青洲医談(二十一種本)」の「卷之一」、「卷之二」、「卷之四」いずれかの写本、あるいはそれら複数巻からの抄本である。したがって、「燈下医談」(後篇)は「青洲医談」と異名同書であると一概に言うことは出来ない。比較のため、「青洲医談(二十一種本)」(卷之二)の項目を示した表3に倣って、表9に「燈下医談」(後篇)(大塚本)の項目を示しておく。順序は異なるが、対象疾患は「青洲医談」(卷之二)の疾患とはほぼ同じであることが了解される。もちろん、両書の文章は全く同一とは限らず、同主旨の文章が過半を占める。

## 9. 「青洲医談(二十一種本)」に現れた麻酔薬関係事項の記述

華岡流医術の最大の特徴は、麻沸散(1810年以降には「麻沸湯」、青洲没後に「通仙散」とも称された)を用いた全身麻酔下で各種の外科手術を行ったことにある。蘭方を含めた他の外科諸流が決して模倣追従できない領域であった。したがって、青洲が全身麻酔についてどのような考えを有していたのかは、関心のあるところであると共に、華岡流の医術の全貌を解明する一つの大きな鍵であるといっても過言ではない。しかし、麻

表8 「灯下医談」(後編)(大塚本)\*の項目とその内容(「見出し」はないので、冒頭に出現する語句を採用した)

交接	腫塊動気	肺辺ノ毒	気瘤	麻沸散後不醒
大便	失栄	瘰癧	乳岩再発者	乳岩
乳岩	金創ヲ洗フ	金創家嘔逆	金創家	傷寒論ニ瘡家
虎杖茎	鉄砲薬	喘息	上消渴	舌疔
膈膜ヨリ上	乳漏膿汁	癩疔	補天丸	諸瘡潰
腫物流注ノ状	黄疸ノ初起	浄府湯ノ腹症	喘促	白散
缺唇	胃脘癰	痼疾	痘	予家ノ羔名
産後ノ崩漏	白駁風	医タル者	凡ソ外科ヲ為ント	
一男子十二三ナル者	結毒	附骨疽	産後発癩	
産后振慄	淋疾	金創	サフラン	瘰癧ノ初起
走馬下疳	産后崩漏血量	胞衣不可不下	産後暈倒	小指ニ爪甲二
犬毒	肉瘤	丹毒	疽	婦人陰中腫
油風	癰	狼毒	産后戦慄	流注
頭ノ疵	頭中ノ疵	妊娠三四ヶ月	打撲	頭ノ疵
面部ノ疵	眼胞ノ疵	目上ニ瘡	血ノ氣道ニ入リテ	
腸出テ大便	腸ヲ縫フ	矢疔鉄砲疔	腸痔	与石斑猫巴豆烏頭
腐菜	瘰病	真頭痛	胸中動悸	痔瘻
肉瘤	癩疾	小児胎瘤	癩疾	腸痔
蘭人乳岩ヲ割ク	乳岩ヲ患ル者	燒酎	金創	
舌岩	舌疔	金創乳岩諸腫物	小児胎中	痢ノ流行
附ノ附骨疽	梅毒	医タル者	医ハ宗儒ノ窮理ノ学	
気虚	瘡口ニ紐	金創	痘瘡貫膿	桂支加烏頭湯
脹満	一婦人咳	脹満	癩狂血量	血量
金創家	吐シテ后渴	十日も経テノ疵	胸ノ疵	指ノ入疵
伊良子ハカスル、ト云	腸ノ切離レタル者	陰莖	伏竜肝	
辟糞便秘者	天刑	瘰癧ノ初起	大頭瘟蝦蟇瘟	烏頭剂
嘔吐蛔虫	天行眼	風眼	癩疾眼中	淋疾
酒齋鼻	林一鳥家方	解頤	乳岩後四日目	麻沸散
淋疾久不癒者	咽喉腐菜	腫物	小児下利	方無古今唯効為良
雜病	精神困妄	鷓胡菜ノ症	一丈夫夏登金剛山	
一男子腹満	神仙病古今	灌水	一婦人臨産数日	南涯翁
琴山先生曰油風	甘草大棗湯	一男子井中ニ入	姜桂湯	胸脇苦満
杉山氏曰苦満凡	但一症ヲ見ス者ハ	頭痛	臀肛ヘ向テ衝様ニ痛	
凡テ無形ノ病	痘瘡発熱	梅毒骨腫	鷓胡ノ症	水気
毒箭	一男子卒然トシテ指頭ニ痛み		一婦人内疳	急癩
産後血量	臨産ノ時疼劇	洗薬方	墮胎振寒	小児滞頤方
汞	緑几丸	扁杖茎	伏竜肝	腸癰一奇方
小産ト脱血	黄疸ノ病根	疹ハ時行ノ気	諸皆催メナル者	脉ハ大小
今時多アル霍乱	一人頭痛身熱	梅毒ニテ齒齦	世ニ脹満ト称スル者	
健胃煎方	痧赤游丹毒	膈噎方	瘰癧	凡梅毒
凡皮薄キ処ニ腐菜	烏頭ノ瞑眩	腐菜瞑眩	癩	
男子十五才膝ニ創	耳輪生虻	一人腰眼有一塊	梅毒	凡ソ子ヲ引キ出ス
包茎反花	一人疥癬	一男子痰疱	一婦人五十余	諸瘡毒尽キテ不癒
一婦人腮耳	真ノ流注	難産ニテ尿道破裂	上腭漏頭痛	五六年陰痿
疣	閉経	留飲	吐血	乳岩療治后風
鶴膝風	打撲凝血	梅毒	疣痔	一女子右手ノ火傷
乳岩腐爛	苓圭朮甘湯加附子	真ノ舌疔	勞瘡難載者	藍葉解毒湯
兼用藍葉散	治白瞑眩方	樺皮	鉄砂効	生々乳

\* : 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学集成 29. 華岡青洲 (一). 東京 : 名著出版 ; 1980. p. 371-448.

表9 「瘍科瑣言」と「青洲医談（二十一種本）」（卷之三）に披見される疾患  
 （順序は「癰疽」の次は「腦疽」で、その次は次段の「疔」へと続く）

「瘍科瑣言」 （二十一種本）	「青洲医談」 （卷之三）*	「瘍科瑣言」 （二十一種本）	「青洲医談」 （卷之三）
癰疽	○	腦疽	○
疔	○	脫疽	×
瘰癧	○	鬚疽	○
腸癰	○	臟毒	○
痔	○	下疳	×
便毒	○	囊癰	○
懸癰	○	腎癰	○
楊梅瘡	○	結毒	○
咽喉	○	時毒	○
瘰癧	○	肺癰	○
多骨疽	○	流注	○
乳癰	○	附骨疽	○
陰瘡	○	傷寒發頤	○
疔癩	○	小腹癰	×
鶴口疽	○	龍泉疽虎鬚毒	○
石榴疽	○	穿踝疽	○
大麻風	×	翻花瘡	×
腋癰 脇癰	○	鼻痔	○
骨槽風	○	癩風	○
齒病	×	腦漏（鼻淵）	○
破傷風	○	打撲	○
湯灑火傷	×	甲疽	○
齒唇	○	疥癬	○
天蛇毒	○	頭痛	×
合火毒	○	衄血	×
牙縫出血	×	血箭血志	○
鷲掌風	○	腎囊風	○
疥瘡	○（疥癬）	膝瘡	○
血風瘡	○	頑癬	○
膿窠瘡	○	凍風	○
火丹	○	天泡	○
肺風粉刺酒查鼻	○	雀斑	×
油風	○	白屑風	○
耳病	×	漆瘡	○
竹木刺	×	瘰癧瘡	○
疔腮	○	痰泡	○
癩風	×	濕腫	○
咬傷	○	風犬傷	○
面生黎黑斑	○	劒叩風	×
枯筋箭	×	脚了	×
手足破裂	○	眼丹	○
黒子	×	眼胞菌毒	×
体気	○	白禿瘡	○
奶癰	○	蟻供頭	○
遺毒爛斑	○	蝮姑串	○
小兒痘風瘡	○	赤遊丹	○
走馬疳	○	重舌	○
胎瘤	○	鷲口瘡	×
痘癰	×	痘疔	○
黄水瘡	○	大人口破	×
臭口螺	○	牛程塞	○
僵螂蛙	×	田螺泡	×
腰痛	○	陰虱	○
葡萄疫	○	百虫入耳	×
惡虫叮咬	×	誤吞針鉄骨硬咽喉	○
中砒毒	○	陰毒	○
失榮	○	委中毒	○

○：記述が見られるもの、×：記述のないもの。ただし、その順序は必ずしも「青洲医談（二十一種本）」と同じではない。

酔薬「麻沸散」を用いた全身麻酔の一般的なことに関する青洲自身の言については、青洲が「乳巖治験録」に記述した以外にはほとんど知られていないし、「外科神書」<sup>24)</sup>や「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>中にも記述は見られない。したがって、この問題の解明のためには、諸史料に披見される麻沸散に関する青洲の片言隻句を収集し、総合し解析する以外に方法はない。麻沸散の処方や用量については「麻薬考」<sup>25)</sup>や「青囊秘録」<sup>26)</sup>にも見えるが、実際の使用に際しての具体的注意などに関しては、ほとんど知られていない。「青洲医談」は、青洲の口述を門人が記録したものであるため、多少の歪曲は避けられないと思われるが、ある程度の真実を伝えていると考えられる。先ず手始めに「青洲医談(二十一種本)」各巻に披見される関係する条文を以下に抄出する。ただし、「麻薬を用テ……」の句を含んだ条文は、単に手段として「麻薬」を使用したことを述べたものであるため引用しない。句読点は著者による。頭の番号は出現の順番を示す。

1) 「巻之一」10 丁裏

小兒缺唇ハ小針細糸ヲ縫フヘシ。麻沸ハ不用。四オヨリハ一銭用ユヘシ。先通例ハ八オ以上ノ者ニ用ユ。或恐痛苦ニ難堪者ハ少用ユル也。大人ニハ二銭位用ユ。

2) 「巻之二」1 丁表

麻沸散ヲ与テ後不醒内ハ防風ヲ不可用。

3) 「巻之二」21 丁表

麻沸散ヲ用ント欲ハ其人ノ診察ヲ能スヘシ。血氣不夾、胸中停痰、宿水或心下痞硬ノ者ハ決シテ不可用。先生腹部ヲ療シテ后、与フヘシ。麻沸湯ハ血氣経絡ヲ一時ニシメル也。大抵十ノ者五六分モシメルモノト見ユ。尽クシメルトキハ死スル也。

4) 「巻之四」11 丁裏

麻沸散瞑眩甚シテ不醒者ハ蘇合香円を与フヘシ。大イニ効アリ。不可不知也。

5) 「巻之四」13 丁裏

先生曰。麻薬ハ散ニシテ用ユレハ、勢強ク瞑眩する也。然レ共、勢強故ニ、吐出スル者アリ。煎湯ニシテ用レハ、瞑眩緩クシテ遅シ。然モ吐出スル事ナシ。人ニヨリテ瞑眩ノ遅速アリ。故ニ醒ルニ遅速アリ。大抵一通ノ者ハ二銭用テ三時位モ不醒。三銭用レハ、翌朝迄不醒。瞑眩スル事、脉必シマル者ナリ。血ノ色モ黒ク粘ルナリ。

6) 「巻之四」14 丁表

先生曰。散薬ハ二銭用テ能瞑眩ス。煎湯ハ散薬ノ瞑眩トハ遅シ。故ニ分量散薬トハ異ナリ。

7) 「巻之四」14 丁表

又曰。麻薬ハ諸書ニ出タリ。然レ共、世医用ル者古ヨリナシ。予始テ用タリ。世医、用ル事ヲ不知ハ、医事ニ心掛薄キ故也。故医タル者ハ心掛第一也。可考。

8) 「巻之四」27 丁表

麻薬煎法。酒一合半、水一合半。半分ニ煎シ一度ニ令服。

以上が「青洲医談」中に見出される麻沸散関係の条文である。当初、青洲は「麻沸散」を文字通り散薬として与えた。しかし、症例を重ねるに従って、散薬として投与すれば作用発現時間は短いものの、嘔吐する者が多いことに気が付いた。条文の5)に示した通りである。吐出すれば、麻沸散の効果が出現しないか半減する。このため散薬としてではなく、煎薬として与えた。当然、名称も「麻沸散」ではなくして「麻沸湯」に改められた。青洲は「麻沸散(湯)」投与後の嘔吐を恐れた。このため術前診察で、その可能性のある者を除外した。つまり禁忌としたのである。それを示したのが3)である。

1)は4歳以下の小児には麻沸散を与えなかったことを明確に示すが、煎薬は別として、これらの小児に散薬を投与することは現実に極めて困難



であったからであろう。4)は「麻沸散」の語が使用されている。いつから覚醒促進剤として「蘇合香円」が使用され始めたのかははっきりしない。2)と5)の条文によれば、成人では2銭を投与すれば、「三時」、つまり約6時間の麻酔が得られるとした。そして、散薬と煎薬では同じ分量でも効果が異なることを述べている。同じく5)の「人ニヨリテ瞑眩ノ遅速アリ。故ニ醒ルニ遅速アリ。」は個人差を述べたものであり、至言である。8)は酒と水で煎じていることを示しており、散薬を酒と共に投与した名残りであろう。散薬を酒で服するのは、特に女性の患者では困難であったと推察される。このために嘔吐を誘発したとも考えられる。もっとも併せて3合の水分を煮詰めて1合半にするのであるから、この過程で大部分のアルコールは蒸散すると思われる。7)の「麻薬ハ諸書ニ出タリ。然レ共、世医用ル者古ヨリナシ。予始テ用タリ。」に青洲の自負を読み取ることが出来る。麻酔薬そのものは昔から知られていたのであるが、それを安全に応用したのは自分であり、最後の「故医タル者ハ心掛第一也。可考。」は、青洲が医師として如何にあるべきかを吐露した言葉である。

## 10. 「青洲医談(二十一種本)」に披見される麻酔薬の名称

「青洲医談」は主として外科的疾患についての記述であるため、写本の書写の年代を特定できる内容を殆んど含んでいない。「青洲医談」中の病名は「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>に準拠したものであり、「瘍科瑣言」<sup>9)</sup>のそれらは「外科正宗」<sup>23)</sup>に由来する。このように病名の多くは中国由来であるから、写本の書写年代の推定には役立たない。「鎖陰」,「鎖肛」は青洲の造語と言われるが、未だその造語の正確な年代が特定されていない。

「卷之一」では「麻沸」(「缺唇」の項),「麻薬」(「蠱毒」,「鎖陰并鎖肛,鎖吻」の項),「卷之二」では「麻沸散」(1丁表,21丁表,見出し(項目)がないため、このように表記),「卷之三」には麻酔薬の語は披見されず,「卷之四」では「麻沸散」は11丁裏,「麻薬」は13丁裏,14丁表,27丁表,

「散薬(麻薬の)」は14丁表に見られる。27丁表の「麻薬」は「麻薬煎法」とあるので「麻沸湯」のことである。

現在の知見では、史料に「麻沸湯」の呼称が初見されるのは、1810年に書かれた野村 鄂の「青洲先生療乳岳函記」<sup>27)</sup>であるから,「麻沸湯」の語が書かれていれば,それは1810年以降の書写に関わることを示している。このことから前節で示した3,5,6の条文は散薬ではなく煎薬としての記述であるから1810年以降に書かれたものであり,青洲がこのように語ったとすれば,これらの講義は1810年以降に行われたことが推察される。なお,19世紀初頭の本邦における麻酔薬開発の状況に関しては,拙稿に詳述してある<sup>28)</sup>。

## 11. 「青洲医談(二十一種本)」に記述された藍屋 勘の病状

青洲が1804年10月13日に行った藍屋 勘に対する左乳房の乳癌腫瘍摘出は記録に遺る世界で最初の全身麻酔下の手術であった。ここでいう「世界で最初」のという条件は,患者名,術者名,手術内容,手術期日,手術場所が明確にされ,それらを証する信拠すべき史料が存在するという6条件が満たされていることを指す。したがって,藍屋 勘の症例は麻酔科学史的に見て,極めて重要であることが理解される<sup>29-31)</sup>。

広く知られているように,藍屋 勘の手術の模様について言及している史料は「乳巖治験録」<sup>32)</sup>であるが,これ以外に赤石希范の草稿「乳癌函譜」に寄せた紀伊藩の漢学者崖 熊野の序(跋)文に精しく記載されている<sup>33)</sup>。しかし,これらの史料に記述されているのは,主に手術法などであり,勘の手術前の状態に関する記述に乏しい。例えば「乳巖治験録」<sup>32)</sup>は青洲による初診時の症状を次のように伝えている。

震これを診するに,左の一の図の如く,左乳房腫大し,乳頭を去る二寸許り,血気少しく変ず。これを按ずるに,結核あり。その大きき覆碗の如し。その硬さ石の如し。病(「痛」の誤記であろう—松木注)まず,痒からず。左肩を引く

に攀急す。時に心痛を致す。(原漢文)……老婦、今、脚気疼痛を患う。(原漢文)

局所的には左乳房の硬い腫瘍、全身的には脚気による疼痛があったことが知られるが、それ以外のことは不明である。ところが「青洲医談(二十一種本)」には決して看過してはならないほどの重要な勘の症状が以下のように記載されているのである。

「卷之一」1丁表

和州五條某ノ母、乳岩ヲ患フ。核ノ大サ梅子ノ如ク、腋下ニ七核アリ。麻薬ヲ服シテ、凡一時許ニシテ割テ出スニ、核ノ重サ廿六錢五分。后八日ニシテ発熱、且ツ瘡口大腫痛ヲナス。因テ、越朮烏ヲ与フ。是即、破傷湿也。六七帖ニシテ効アリ。又創痕ノ廻リニ赤色ヲナシ、腋下モ又同色をナス。左ノ手モ腫色ヲ生ス。是即、流注ノ証ニシテ、越朮附ノ的症也。金創并ニ瘡瘍共ニ斯ノ如キ証アリ。全ク外襲ノ事也。皆越朮附ニ宜シ。凡、破傷湿ニ越朮附ヲ用ル事、古人未発ノ手段ナリ。能々玩味スヘシ。

この記述は3つの重要な点を示している。第一点は、勘の乳癌は術前、相当進行した状態にあり、すでに腋下に触知されるリンパ節が7個も出来ていたということである。このような状況であれば、勘が術後、比較的早期と思われる約4カ月半後の1805年2月26日に死亡したことも容易に納得できるし、その死因は乳癌の進展に伴う全身状態の悪化の可能性を強く示唆する。このことは、当時、青洲は腋下の核についての意義、その重要性を理解していなかったことを示唆している。「外科正宗」の「乳巖」の条<sup>34)</sup>にも、転移については全く記述が見られなかったから、青洲が知らなかったのはむしろ当然のことだった。しかし、同様の症例を経験することによって、青洲は、その後、腋下リンパ節への癌の転移の意義を十分に理解したようで、その様子は1811年に千葉良蔵が青洲の乳癌についての講義を記録した「南紀青洲先生乳巖治術口授」(内題は「辨乳岩証并舛

稿」)<sup>35)</sup>には次のように記されている。

一 種(「腫」の誤り—松木)腋下ニ結核ヲ生スルモノアリ。此症、乳を治スト雖共、腋下ヲ治セサレハ、恐ハ再発セント。是を以青洲外治ヲ施サスシテ、湯液貼薬を以スレ共、未タ其症(「応」の誤り—松木)スルモノヲミス。(句読点—松木)

とあり、腋下に転移して「核」を結ぶ症例では、通例、手術を行わなかったことが明らかである。これに続いて、千葉はさらに次のように記している。

按スルニ壯実ノ者、腋下核モ乳ノ法ニ随テ治(「ヲ」欠落—松木)試ント欲ス。動脈近キ処ナレ共、内外ノモノ故、可治乎。然共、腋下ニ及フ者ハ、多ハ虚裏ス。且、此ノ患ルモノ数人を観ルニ、患ノ有ル方ノ半身麻痺強痛、或頭痛腰痛或偏眼ノ胞腫微爛シテ、女子多ハ経水ノ変アリ。此等ノ症ヲ害(「審」の誤り—松木)ニシテ方ヲ求メハ、散堅消塊ノ治モアルヘキカ。余未治之。后学者試之。(句読点—松木)

これを見れば、青洲は転移した乳癌が難治であることは、この時点で十分に理解していたようで、さらなる治療を後学の者に託している。なお、千葉良蔵の「南紀青洲先生乳巖治術口授」については拙稿<sup>36)</sup>を参照して戴きたい。なお、青洲の乳癌手術における再発の問題については、別稿<sup>37)</sup>に詳述した。

第二点は、術後8日目に感染に起因すると思われる発熱と創口の腫脹、そして腫脹が左手にまで及んだことである。このことは「乳巖治験録」でも言及されていない。これまで知られていなかった新知見である。第三点は、術後の「越朮附」(越脾加朮附湯)の投与である。これも「乳巖治験録」には見えない。手術直後には、塩を加えた汗湯を与えて、麻酔からの覚醒を促進させ、次いで甘草瀉心湯を与えたことが記されているだけである。この処方主として腫脹に対して投与されたので

あろう。いわゆる術後の感染、青洲はこれを「破傷湿」と称しているが、これに対して「越朮附」を投与するのは、青洲の創始であるとしている。

以上によって、上に引用した記事は、これまで不明であった諸点を明らかにした点で重要な意味を持つことが理解される。

## 12. 「青洲医談（二十一種本）」に見る 華岡青洲の医の哲学

「卷之二」には青洲の医学、医術に対する考え方を示している重要な条文が記されている。以下に引用して少しく解説を試みたい。原文に見出しはないが、ここでは段落の冒頭の語句を見出しとして用いた。句読点は著者による。

「医タル者」7丁裏～7丁裏

医タル者ハ、広ク方書ヲ涉獵セスンハ有ヘカラス。然レ共、書ヲ讀ニ法アリ。儒者ノ歴史ヲ讀ム如クスレハ、仮令数百卷ノ書ヲ讀尽スト雖、治術ニ益ナシ。先、方書を讀ント欲セハ、患者ヲ診スルヲ事トスヘシ。而後、仲景ノ書ヲ規則トナシ、外台千金ヨリ回春入門等ノ書ニ至ル迄、広ク涉獵スヘシ。譬ハ、今、水腫ヲ患ル者ヲ求メハ、外台千金等ノ水腫門ヲ能引合テ讀ヘシ。サスレハ、彼書ニハ如此キ論アリ、此書ニハ又如此論アル事ヲ能記憶スル者也。且、患者ト又相照シ考レハ、自ラ發明スル事多シ。如此シテ、数卷ノ書ヲ讀ミ、数百人ノ患者ヲ診スレハ、大ニ治療ニ益アリ。且、其言ヲ妄（「忘」の誤記－松木）却スル事ナシ。唯、歴史ヲ讀ム如クスレハ、此証ニ此治法アル事ヲ空看過シテ、其的（「適」の誤記－松木）否ヲ不知也。然レ共、閑暇アレハ、博覽ヲ動シテ、異症ニ逢ハ、其方証ヲ抄写スヘシ。是、其大法ナリ。

学習法についての教えである。臨床、とくに実地の教育を重んじた青洲ならではの教え方であった。実際に患者の病態を診て、それを広く教科書に求めるという方法で、このようにすれば、教科書で学んだことを忘れないとした。実際に現場で経験したことは、長く記憶に留まって忘れない。

臨床に従事する者が等しく経験する所である。最も基礎的な教科書として「傷寒論」などを挙げていることは、次項に示すように、外科医としての青洲は内科を重視したことの現れである。

「凡ソ外科ヲ為サント」7丁裏～8丁表

凡ソ外科ヲ為サント欲ハ、先、内科ヲ精スヘシ。然サレハ、治術ニ益ナシ。今、此ニ瘡瘍ヲ患フル者アリ。診之ニ、陽虚ノ者アリ。血虚ノ者アリ。気血共ニ虚スル者アリ。是ヲ能診視シテ、治術ヲ施シ、且、薬ヲ投スルハ、其常ニ復スル事速也。若、不知シテ唯外治ノミニテ瘡瘍ヲ医スル時ハ、仮今日ヲ経ト雖共、難癒也。且、癒難キノミニ非ス、荏苒トシテ遂ニ命ヲ損スルニ至ル者間アリ。医タル者ハ、其気虚タルト血虚タルトヲ診視シテ不可不知。是を知ルニハ、内治を精スルニ非ンハ難得モノナリ。

外科医であっても、医学の基本である内科を知悉していなければならないとするもので、青洲の書で知られる「疾病を療せんと欲すれば、当に其の内外に精しかるべし。方に古今無し。唯、其の知を致すに在り」（原漢文<sup>38)</sup>の前半に相当する。ここでの「内科」は医学の基本的知識のことである。引用文だけでは、これがいつ青洲の口から発せられたかを特定することは出来ない。

「医ハ宗儒ノ」16丁裏～17丁表

医ハ宗儒ノ窮理ノ学ノ如ク、先ツ人ノ平常ノ身ヲ得ト能知テ、而后、其人ノ病アル処ヲ見サレハ、知レヌ者也。名医トテ他ナシ。平常ノ処ヲ知テ其病ヲ察スルニアリ。気虚スルト、表ノシマリ薄クナル故ニ、自汗盗汗出也。タトエハ、刀ニテ切時ハ、人必絶倒ス。血出ル故ニ絶倒スルニ非スヤ、気洩テ絶倒スル也。其所以ハ、縫時ハ必腫者也。是気ノコモルニ非スヤ。縫ヌ内ハ疵口開キタリ共、腫ハコヌモノナリ。

青洲が、気、血、水説を信奉していたことを示す文章である。青洲は、中でも「気」を重視した。先ず、身体の平常、つまり、生理的狀態を知るこ

とが肝要であるとした。前項で示した「内外に精しかるべし」の「内」には、現在でいうところの解剖学的、生理学的、病理学的知識、つまり基礎医学が含まれている。これを習得して初めて病態が理解できるとした。青洲は吉益南涯に気血水説を学んだのであるから、この文章は、相当古くから、門人たちに語られたと思われる。「気」についての青洲の考え方を能く表しているのが「巻之二」の三十二丁表の記述で、次のように述べられている。

凡、但一症ヲ見ス者ハ、方ヲ処シ難シ。故ニ仲景ト雖共不能処アリ。故ニサクリテ療治ヲ行也。併シナカラ、又ソノ次第アリ。水、血、本化物。但、気ニ因テ運動ヲ能スル者也。故ニ先、其気ヲ療スル方トス。以下略。(句読点-松木)

青洲が、「血」、「水」よりも「気」の治療を最優先にして行ったことが理解される。

このようなことから、青洲は乳癌に対して、乳房切断術ではなくして乳癌腫瘍切除術を考案して実行した。したがって、上に示した条文が、青洲の口からいつ発せられたかを特定できない。しかし、これより前の条文に「乳岩ヲ患ル者妊娠スレハ、核、俄ニ大ニナル者也。」(十四丁裏、読点-松木)は、少なくとも妊婦を含む数十人の乳癌患者を診察しなければ、言えない言葉である。このことを考慮すれば、この条文は40例以上の手術症例を経験した1812、3年以降の言葉である<sup>39)</sup>。

以上のことを総合して考えれば、「巻之二」の各条文を検討しても、この巻の成立年を推定できる記述は披見されなかったが、青洲の医哲学が強く主張されていることから、その成立は、華岡流の医術が確立した1810年前後まで遡ることが出来る<sup>40)</sup>。

### おわりに

華岡青洲の著述については、名前だけは知られているものの、書誌的事項を含めた詳細については殆んど研究が進んでいない現状である。青洲の

外科に関係した著述の一つ「青洲医談」に関して51本の写本を調査して、本間玄調が1850年に編集した4巻本の「青洲医談」が最も信頼できる写本であることを確認した。その原初の巻は近江出身の門人稲川梁策が1816年までに青洲の口述を記録した4部であると考えられ、それぞれに後年の口述が追加されて、4巻本が出来たと推察される。この内の2巻は青洲が没した1835年前後から「灯下医談」とも称されるようになった。現今、所在が確認されている「青洲医談」の多くは1巻本であるが、それは4巻本のいずれかの書写本であるか、複数の巻からの抄出本である。

「青洲医談」は、青洲の医学に対する考え、つまり医の哲学に関する条文を含んでいることが最も重要かつ注目すべきで、青洲の思想を理解する上で決して等閑にしてはならない著述である。本書は青洲の外科的疾患全般の治療法が網羅的に述べられているばかりでなく、華岡流の医術の一大特徴である麻沸散の使用法に関する注意点が散見する。この点、青洲の医術を考究する上で欠かすことが出来ない著述である。

稿を終えるに当たって「青洲医談」の写本の閲覧にご高配を戴いた下記の諸施設に感謝の意を表す。

京都大学附属図書館、慶應義塾大学、研医会図書館、国立東京博物館、国会図書館古典籍資料室、武田科学振興財団杏雨書屋、内藤記念くすり博物館、宮城県立図書館、早稲田大学附属図書館。(五十音順)

### 参考文献および注

- 1) 仁井田好古の撰になる「華岡青洲墓誌銘」には、著述は凡そ二十七種であると記されている。
- 2) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京:吐鳳堂書店;1923. p.381-386
- 3) 春林軒二十一種目録. 青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種初集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-1
- 4) 青洲医談. 青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種五集, 六集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-5, 杏3169-6
- 5) 富士川 游. 日本医学史. 東京:裳華房;1904.



- p. 610-617
- 6) 文献2. p. 383
  - 7) 関場不二彦. 西医学東漸史話(下). 東京: 吐鳳堂書店; 1933. p. 284
  - 8) 宗田 一. 収載書解題. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲一) 東京: 名著出版; 1980. p. 56-57
  - 9) 瘍科瑣言. 青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種二集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-2
  - 10) 例えば「癩癧」に対して、「卷之一」では、「癩癧ハ、初起ニ夏枯草煎或海藻湯ヲ用テ消スル也。若、夫テモ消散セズ者ハ、披針を刺シテ、抜絹を指シ置也。若、癩浮ル者ハ麻薬を用テ癩ノ核ヲ取事アリ。賈氏曰癩ニ夏枯草撰煎ヲ用テ黒物を下ス者ニ、能効アル也。……癩癧ノ治法甚難シ。輕易ノ事ニ非ス。漫ニ不可用。猶、后ノ賢者ヲ待。」(28丁表と裏)とあるが、「卷之二」では「癩癧ハ、先、初発ニハ夏枯草煎或ハ海藻湯ヲ用テ消スルモノ也。若、夫ニテ不消散者ハ、披針ヲ刺シ、抜紐ヲ挟ミ置也。若、癩ノミ浮ミ、歴々タル者ハ、麻薬ヲ服シ、乳岩割法ノ治ニ從フヘシ。」(39丁表)とあり、「瘍科瑣言」では「其初起、頭項ニ生シテ、累々歴々珠ノ聯ナルカ如ク、或ハ左、或ハ右、或ハ左右共ニ生ス。下ハ缺盆ニ及ヒ、上ハ耳後に及フナリ。以下、44行省略。(54丁裏から57丁裏)(以上、句読点-松木)
- 以上で、同じ「癩癧」に対しても記述は同じでないことが理解される。
- 11) 松木明知. 阿片と秘薬「津軽一粒金丹」. 松木明, 松木明知. 津軽の医史. 弘前: 津軽書房; 1971. p. 153-164
  - 12) 松木明知. 秘薬「津軽一粒金丹」その後の知見. 松木明, 松木明知. 続津軽の医史. 弘前: 津軽書房; 1975. p. 59-62
  - 13) 東京国立博物館は、所蔵するもう一本の写本「青洲先生医談」(請求番号QB-7429)の書写年を1816年とするが、それを証する記述は写本中には見られない。「青洲先生医談」(請求番号QB-530)が1816年に書写されているので、機械的に1816年としたのであろう。
  - 14) 文献2. p. 451, 476, 490
  - 15) 青洲先生医談四巻. 門人稲惟家筆記. 文政10年. 美濃 早川賢造写本 一冊. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 乾4253
  - 16) 文献2. p. 464
  - 17) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖華岡青洲. 和歌山: 医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 184)
  - 18) 文献2. p. 442-443
  - 19) 青洲先生医談. 内藤記念くすり博物館大同文庫所蔵. 請求番号 60394
  - 20) 青洲先生医談二巻 続医談残一卷存卷第二. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3799
  - 21) 青洲先生治験録(安田孝平記). 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲一) 東京: 名著出版; 1980. p. 451-508
  - 22) 文献20. p. 488-489
  - 23) 外科正宗. 小曾戸 洋, 真柳 誠編. 和刻漢籍医学書集成 第十三輯. 東京: エンタプライズ; 1991
  - 24) 外科神書. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学集成29. 華岡青洲(一). 東京: 名著出版; 1980. p. 1-85.
  - 25) 松木明知. 新出の中川修亭編「麻薬考」写本3本の書誌学的検討—「麻薬考」の成立と7種の写本の系統—. 日本医史学雑誌 2017; 63: 61-69
  - 26) 青囊秘録. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学集成30. 華岡青洲(二). 東京: 名著出版; 1980. p. 1-135
  - 27) 下記文献に全丁をカラー写真で示してある. 92頁と93頁の間.  
松木明知. 華岡青洲と「乳巖治験録」. 弘前: 松木明知; 2004.
  - 28) 松木明知. 華岡青洲の「麻沸散」開発と日本における19世紀初頭の全身麻酔薬. 日本医史学雑誌 2016; 62: 413-428
  - 29) Matsuki A. A Review of The Papers on Seishu Hanaoka Written in English and German. Seishu Hanaoka and His Medicine A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 186-191
  - 30) Matsuki A. Seishu Hanaoka's Philosophy of Safty and Challenge. The Origin and Evolution of Anesthesia in Japan. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2017. p. 83-91
  - 31) Giesecke AH and Matsuki A. Hanaoka A Great Master of Medicine, and His Book on Rare Diseases. American Society of Anesthesiologists Newsletter. 2008; 72: 28-30
  - 32) 下記文献の巻頭に全丁をカラー写真で示してある.  
松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前: 松木明知; 2002
  - 33) 松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016; 62: 285-294
  - 34) 文献23. p. 119-124
  - 35) 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵. 請求番号 二29
  - 36) 松木明知. 千葉良蔵の「辨乳岩証<sub>并</sub>治方艸稿」と「乳岩辨証」(「乳岩辨」)—1811年における華岡青洲の「乳岩」治療の実際—. 日本医史学雑誌 2016; 62: 429-437
  - 37) 松木明知. 華岡青洲の乳癌手術における再発例についての考察. 日本医史学雑誌 2019; 65: 85-93
  - 38) 文献2. p. 19
  - 39) 文献2 (p. 274-286)に復刻されている「乳巖姓名録」によれば、1811年9月までに38人の手術患者氏名が記されている。記入漏れなどがあるので、この数字は正確なものではない。なお「乳巖姓名録」の最初の



3名は手術を受けなかった。

40) 華岡流の医学がいつ確立されたか、その時期を特定するのは甚だ困難である。しかし、著者は遅くとも1810年前後と推定している。その根拠は、(1) 1807年に井澤元民が書写した「花岡先生口授」に、諸家は金創治術における死生を論ずることを専一にしていると批判して、「予ハ生死ヲ論セス。先治を施スナリ。」と主張している。青洲が、他流と異なることをこのように明確に述べている文章は極めてまれであ

る。(2) 1809年に作られた菅茶山の「讚」(漢詩)の中で「神醫」と評されたこと。(3) 1812年に杉田玄白が青洲宛の書簡で、青洲の業を高く評していることである。(松木 華岡青洲と麻沸散—麻沸散をめぐる謎—(改訂版)。東京：真興交易(株)医書出版部；2008。p.194-198) 当時、蘭学界の第一人者であった杉田玄白から、自分の業績に対してこれを称賛する書簡を送られたことは、青洲は、自分が創始した医術が蘭医学界からも高く評価されたと自覚したと思う。

## Bibliography, Appearance, and Contents of *Seishu-idan* by Seishu Hanaoka

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

The achievements of Seishu Hanaoka have been studied for a hundred years. In spite of this, the details of his writings have not been adequately elucidated because there are neither manuscripts in his own handwriting nor published books. In addition, some of the manuscripts have the same title with different contents, or different titles with the same contents. This has caused serious confusion. I have meticulously examined the manuscripts of *Seishu-idan*, and have identified a four-volume manuscript, edited in 1850, as the most reliable. The reason is that the editor was Gencho Honma, one of Hanaoka's best students. *Seishu-idan* includes many important points concerning the practice of surgery, medical philosophies, and precautions for using Mafutsusan. My examination clarified that the original manuscript, which was based on Tada-i-e Inagawa's transcription of Hanaoka's oral instructions on surgical diseases, most likely appeared by 1816. Thereafter, further instructions were added, creating Volumes 2 through 4. In later years, Volumes 2 and 3 have also been titled *Toka-Idan*. The manuscripts I examined are either transcriptions of one of the volumes, or abstracts of Volumes 1, 2, and 4. In order to understand the details of Hanaoka's oral instructions, his medical philosophy of medicine, and the general anesthetic Mafutsusan, it is essential to study the four volumes of *Seishu-idan*.

**Key words:** Seishu Hanaoka, *Seishuidan*, four-volume manuscript, Gencho Honma, *Toka-idan*